俳　句　雑　誌

水　明

2022　6月号

令和四年六月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五巻第六号

《今月のかな女》

盲猫梅雨入りもしらず歩き居り

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

爽やかな五月が過ぎ、うっとうしい梅雨の時季を迎えた某日、かな女が外出先で、物に躓きながらよたよた歩いているみすぼらしい猫に遭遇した。観察していると、どうやら眼が見えない様子で哀れになった。犬と違って水に濡れるのを嫌がる猫が、梅雨入りした街頭をさ迷う姿はまことに痛ましく、猫好きであるかな女の心を抉ったことであろう。中七の措辞に、かな女の憐憫の情が籠められている。

（鬼之介・註）

水　明

第1101号

―華の一句―

のどけしや爪の一つを塗り忘れ

内田恵子

化粧とともに、マニキュアは女性にとって身だしなみの要素であろう。身も心も軽やかな春のひと日、颯爽と出かけたのだが、電車の吊り手を持った手の指を見てちょっと驚いた。爪の一つにマニキュア液が塗られていなかったのだ。自分の迂闊さに苦笑をもらしつつ、丁度空いた席に腰掛けて心地よい振動に身を委ねた。

（鬼之介・推薦）

水明

令和４年
６月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
愛鳥週間（作品）　大村節代　6
美術館（近詠）　菊池ひろこ　7
囀（近詠）　町野広子　8
風琴　※雪欄作家近詠鑑賞　井口俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　大橋廸代　大村節代　小倉倭子　ほか　12
季音「月」（同人作品）　藤澤喜久　大場順子　梅澤佐江　ほか　19
季音「花」（同人作品）　日髙道を　青木鶴城　大塚茂子　ほか　24
現代俳句鑑賞　網野月を　28
『水明誌』を繙く　宮崎斗士　30

特集　句集『マネキン』鑑賞　32

水明集　越田栄子　染谷正信　山岸久美子　ほか　53

水明集作品評　山本鬼之介　66
水琴窟（水明集四月号鑑賞）　池田雅夫　70
山紫集　72
鼓笛集（同人作品）・私の一句　78
俳誌望見　梅澤佐江　31
句集喝采　近藤徹平　52
水明例会報・各地句会報　81・85
全国大会のお知らせ　89
夏季競詠・作品募集　90
第十七水明抄・作品募集　91
風声・発展基金御礼・水明夏行のご案内　92
後記　94

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

愛鳥週間

山本鬼之介

筍を幹竹割りにする女

首夏の図書室おのろけ豆の語源かな

到来の秘伝の酒に初鰹

山は力を河は情けを愛鳥日

沖の卯浪を見据ゑ青年実業家

脱げさうで脱げぬ木沓よ風薫る

新緑に溶くる淑女の乗馬服

サングラス外し男がなほ野暮に

美術館

大村節代

エスカレーター空へ空へと風光る

仁清に見惚るる人よ春の展

立ちつくす紅白梅図うららけし

大和絵に似絵ありとや春惜む

一樹から観音生まる涅槃西風

利休忌や茶道具空し作法なほ

教祖とは時に狂人春日影

熱海の小高い山の山頂に、広大なMOA美術館は建っている。絵画の鑑賞に疲れて庭園に出ると、相模湾が一望に、初島や大島が間近に見える。

美術館は東洋美術を中心に厖大な収集品を誇り、三大国宝を持つ。その国宝の一つ尾形光琳の「紅白梅図屏風」に因み、梅の咲く季節に国宝が公開されるという。

MOA美術館は、世界救世教が運営しているそうだが、宗教色は全く感じない。しかし、復元とはいえ、秀吉の黄金の茶室の金ピカには恐れ入った。

囀

菊池　ひろこ

囀の地を皇族のセダン這ふ

借景に葉桜と風官庁街

埋めらるるものに外堀花筏

芝陽炎書斎を置かば中二階

黒漆の箪笥に眠る春ショール

野遊びや背で見分くる縁者たち

覚めてより履物探す春の夢

「ペンは剣よりも強し」なる成句を元とした日本の大学の紋章が知られている。この言葉は、十七世紀フランスのある宰相が自分の暗殺計画を知って放ったものだという。「自分は剣を持てないが、剣を持った者の処刑命令書にサインは出来る」。昭和時代の日本の天皇は、開戦に反対して、明治天皇の御製「四方の海みなはらからと思う世になど波風のたちさわぐらん」を示した。ペン（和歌）が剣（戦争）よりも弱かった例とは言えないか。

風琴

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　町野広子

◇ひとコマ漫画（三月号）　星野和葉

漫画館におどける巨匠春隣

コロナ騒ぎで行動に制約のある暮しとなり久しい。そんなある日作者は盆栽村を訪れ、その足で市立漫画会館へ立ち寄る。そこは日本の漫画の礎を築いた北沢楽天の住居跡に建てられて居り、画室や自筆の風刺漫画・日本画の展示がある。

大賞の絵に鰐もマスクを館うらら
大胆に躍るアマビエ春の色
春色やひとコマ漫画句に通ず

当館では毎年一コマ漫画の募集があり、力作が常時展示されている。現在大賞の作品は、コロナ禍の今を風刺した物で鰐がマスクをしている。大きな口に大きなマスク。インパクト大で諷刺漫画に相応しい。又、アマビエと言う疫病封じの魚っぽい妖怪が、春らしい色に塗られ軽妙に躍っている。どうかコロナを封じて貰いたい。そして作者は次々と作品に接しそれぞれ笑ったり感心したりの中で、ひとコマに込められた思いは、如何に言葉を削り十七文字の詩に作り上げるかと言う俳句に通じる事に思い至る。

館を守り共にほほゑむ紅梅よ

館を守るかに植えられた紅梅は、訪れる人を癒やしてくれる。身近に未知の所を見つける作者と共に楽しませて戴く。

◇薄ら陽（三月号）　吉住光弥

薄れゆく故老の記憶牡丹鍋
現し身にたまりし憂ひ煮凝れる

人生の俳句の大先輩で居られる作者。このコロナ禍の中でお姿を拝見する機会も減ってしまった。しかし今回句に接する機を得て、ご健在振りが伺え一安心。一句目筆者の身近では中中猪や鹿のいわゆるジビエ（野生鳥獣肉）に出会える事は無いが、作者は牡丹鍋を肴に多分熱燗で一献。至福の時間を過す。飲む量は減っても飲める事は幸せ。二句目も現在のご自身の憂いを煮凝りに重ねて居られるが、誰しも記憶は薄れる物。しかし永年の経験や感性は衰え知らず。

痛む喉眠れぬのどや地吹雪来
蓮の骨は万の銹槍構へなす
薄ら陽に瞬の影見せ冬の蝶

少し喉が痛い、何だか眠れない今夜は地吹雪が来るぞと温かくして休む。身体が教えてくれる体験であろうか。二つ目の「のど」を平仮名にして成功。秋蓮の葉は破れやがて棒だけになりまるで銹槍に見える「万の銹槍」が胸を打つ。

冬のある日庭を横切った小さな蝶。ほんの一瞬の事ではあったが、その健気さに声援を送ると共に、元気を貰った作者どうぞお元気でと光弥氏へもエールを送ります。

◇春早早（四月号）　西山貴美子

アンソロジーに黄金（くがね）の枝折春立ちぬ
丈六のあえかな笑みや春浅し

愛読のアンソロジー。その詩集には黄金の枝折が挿まれている。黄金の枝折はずっと以前に挿んだ物。しかしそれは、詩集と同じく褪せる事なく作者の心を占めている。

二句目、一丈六尺の大きさに作られた結跏趺坐（けっかふざ）の姿をしている仏像である「あえかな笑み」に、このみ仏の柔和な姿が見えて来る。春の季語でこそ成り立つ二句と思う。

ひといろは神のしづくか牡丹の芽
春早し窓辺を過ぎる鳩の胸
ももいろの猫の肉球春の雪

三月になると枯木のような牡丹の枝に燃えるような赤い芽が出て来る。この小さくいとしい物を「神のしづく」と感じる作者の、その感性こそ天使の心だと思う。二句目窓の外を一羽の鳩が歩いて行く。胸を突き出し首を振りつつ歩く。多分あとの一羽もすぐ側に居るはず。恋の季節で新居を探しに訪れたのかも知れない。次は猫の肉球「ももいろの」が何とも可愛く、柔らかく吸い付くような猫の肉球を思い出す。作者の膝の上に身を預け互の信頼とたっぷりの愛情。

何れの御句にも少女のような雰囲気と優しさに溢れていて作者のお人柄が伺える。周りの人々からも親われて居られるに違いない。

◇浅き春（四月号）　栢尾さく子

山の春象形文字の渓の木々
鐘供養ほこりほこりと土竜塚

山の浅い春には裸木が多い。人の手が加わらず、自由に伸びる渓の枝々をまるで象形文字のようだと感じて、当り前の景色に目を止めた作者。二句目新たに鐘を鋳造した時に行う供養で、多くは女性が撞き初めをするらしい。又は現在寺で用いている鐘の供養で、日頃の感謝を捧げる。供養の行われる寺の境内には、土竜の塚（土盛り）があちこちに見られ、「ほこりほこり」が塚の様子を良く表わし、自然豊かな情景が浮かぶ。

若き日の母の肖像花の雲
初蝶を友の化身と追ひかける
乱心の武者絵凧なり失墜す

肖像画であろうか写真であろうか、手元に若い母が居る。大切な大切な一枚。遠い日の母とのあれこれを想い出す。それは永遠に忘れない。季語にしみじみ深い想いが伝わる。

初蝶が目の前に現われた時、友の化身に違いないと、とっさに追いかけてしまった。大切な人を亡くした心境に身がつまされる。凧揚げは風との勝負で強くても弱くても困る。勇ましい武者絵凧が、風の気紛れでクルクル乱れた末に落ちてしまった。「乱心の」導入「失墜す」の下五、何事かと心騒がせて拝読すれば成程凧であった。武者も風には弱いのか。全ての御句に作者の強い信念と力強さを感じた。

硯箱

◆季音四月

井口俊晴

夜をかけて犬の産まるる春一番　　石山かつ子

夜もだいぶ更けてきた。外は春一番が吹き荒れているようで、さっきから雨戸がガタガタ音を立てている。しかし、家族みんなが緊張しているのは、吹き荒れる風のせいではない。可愛がっている犬のお産が始まったからだ。昔から「犬は安産の象徴」と言われているが、犬にとっては迷惑な話。これから夜中にかけて、産みの苦しみに耐えなければならない。私は以前読んだことがある「こいぬがうまれるよ」（ジョアンナ・コール著、福音館書店）という写真絵本を思い出した。可愛い仔犬は何頭産まれたのかな。

心持ち素肌に微温雨水かな　　小倉倭子

きょうは二十四節気の雨水。降る雪が雨に変わると言われている。気のせいかも知れないが、厳しい寒気もちょっとばかり緩み、セーターの下で息をひそめて隠れている素肌にも、ほんのりと暖かさが感じられるようになった気がする。他人に見せることはないが、「白くて肌理が細かい」と以前母が褒めた私の素肌、もうしばらくすれば、手や脚くらいならお見せしようかしら。

鰤大漁かもめ引きつれ接岸す　　矢作水尾

鰤漁に出ていた漁船が大漁旗をはためかせ、続々と港に帰って来た。波を蹴立てて走る船の上には、漁のおこぼれを狙ってかもめがぐるぐる飛び回っている。まるでお供を引き連れているようだ。その数は岸壁で待っている漁師の家族よりずっと多い。たった今、エンジンの音がひときわ高くなって漁船が岸壁に接岸した。

梳く髪の艶増すけはひ雨水かな　　梅澤佐江

寒い日が続いたため、つい、いい加減にしていた髪の手入れをすることにした。なぜなら、きょうは二十四節気の雨水。

これからは雪が降ったりして凍える思いをすることもないはず。愛用して飴色に輝く柘植の櫛を取り出し、自慢の長い髪を梳く。梳くたびに黒髪の艶が増し、得も言われぬ甘い香りまでしてくるようで、我ながらうっとりしてくる。自分もなぜか色っぽい気がする。

ベビーカーの双子すつぽり冬帽子　　町野広子

お母さんにとって、寒い日の赤ちゃん連れの外出は大仕事。風邪をひかないように温かくして、それも双子だとなると…。ムクムクのセーターを着せ、ちっちゃなおつむには、これもお揃いの毛糸の冬帽子を、おでこが隠れるまですっぽりかぶせる。おまけに、すごく横幅がある双子用のベビーカーを押して歩く。傍で見ていてもすごく大変そうで、なんとかして上げたくなる。

土筆野に歩の定まらぬベビー靴　　西浦千枝子

穏やかな陽気に誘われて野原に出ると、土筆があちこちに顔を出している。尖った土筆の穂が気になるのだろう。やっと歩き始めたばかりの幼い子が、危なっかしい足取りで近寄って行く。ベビー靴をはいた足元がよろよろと定まらず、今にも転びそうだ。見ているこちらの方がハラハラする。それでも、大人達の心配をよそに、本人はヨチヨチ歩きを楽しんでいる。

センサーライトうかれ猫らの邪魔をする　　大塚茂子

「愛しちゃったのよ♪」というマヒナ・スターズの歌があったのを覚えているだろうか？ただし、恋に落ちたのが猫たちだとなると、笑ってはいられない。何匹も集まって鳴き喚き、喧嘩をして、うるさいったらない。でも、軒先などにセンサーライトを付けていると、近くを横切った時にセンサーが感知してパッと明るくなり、うかれ猫どもは驚いて退散する。他人の恋路を邪魔するのは無粋だが、相手がのぼせ上がった猫なら許されるだろう。

頬杖の生徒ちらほら春の午後　　宮崎紫水

春は物思う季節。思春期の生徒たちだったら、なおのことだろう。校庭で元気にボール投げや縄跳びをする生徒が大勢いる一方、開け放った窓辺で頬杖をつき、クラスメイトが駆け回る様子をぼんやり眺めている姿もちらほら。下校までであと一時間、社会科の授業が残っている。「あの先生の話ってつまんなくって、何だか眠くなっちゃうんだなあ」とか考えている。

季音雪

花吹雪　大橋廸代

花明り絵馬よりひびく笛太鼓
思惟仏の御手は四本ぞ花吹雪
衣摺れは清姫ならむ紅枝垂
タンカー三隻微動だにせぬ暮の春
掛軸をかな女に替ふる暮の春

亀鳴く　大村節代

五つ玉の父のそろばん長閑けしや
裏口は一人の幅よ木瓜の花
「ゲルニカ」に学ばぬ奴等亀鳴けり
亀鳴くや物言ひたげな理系女子
天女時に鬼女になりさう花月夜

沈思黙考　小倉倭子

神磯の日の出の色よ濃山吹
横顔の垣根越しなる面影草
濃山吹白山吹の狭間風
鬱の日のうつたうしきや濃山吹
止まり木に沈思黙考啄木忌

鎮花祭　栢尾さく子

智恵子抄刻むいしぶみ春怒涛
小綬鶏に急きたてられて急ぐ川
綿菓子を買つて帰りぬ鎮花祭
野仏の大き耳朶雲雀聴く
花終る校舎の窓に顔溢れ

花筏　菊池ひろこ

花筏かつて不浄門なる三文字
花曇鏡の奥を拭く女
ピンク着る人らライバル花曇
人工の森に囀道しるべ
チューリップ黒の似合はぬ齢はなし

赤心　五明昇

初蝶に肩貸してゐる山男
陽炎を脱ぎて駈け出す放れ駒
賢妻も愚妻と呼ばれ四月馬鹿
故郷や遺影の下の大朝寝
赤心は老いても褪せず木瓜の花

ハムサンド　境　延昭

春の風邪湿めり気のなきハムサンド
大太鼓響動もす春の甲子園
かたくなに本籍守り鳥雲に
池の辺の馬頭観音蝶の昼
春の雷門のペコちゃん舌を出す

花季　椎野　美代子

初桜胸突く坂の息を吐く
さらし巻く胸乳装ふ花衣
揺れゐるは枝垂桜か私か
八重桜人より遅れ笑ふ母
花万朶媚薬のごとき夕薄暮

花過ぎ　島津　初花

桜散りまん丸月の残りけり
桜ながし開店喫茶のサービス券
縄文書繙きをれば桜舞ふ
花冷えや土器接合のパズルめく
新しき背広の光る八重桜

卒寿　鈴木　康世

弾む声雀がくれの通学路
登校の列へ一閃つばくらめ
子と孫に卒寿祝はる花月夜
「句と暮らす道具」贈られさくらの夜
胸に棲む火種眠らせ花は葉に

暮の春　田寺玲子

暮六つの風紋崩る花の雨
春眠をさそふ雨音模糊として
高殿の雨に鎮もる暮の春
雲雀鳴く埴輪の並ぶ墳丘墓
駒下駄の春の底冷え先斗町

花時　十倉和子

早立ちに鈴振るやうな花時雨
衿足剃つて男を上げる桜冷え
花簪少年凛と修羅を舞ふ
花守へ祖母の手馴れの腐れ鮨
白藤に屋根盛り上がる巫女溜り

明るい女　永野史代

陽炎や彼方に潜む脱走兵
戦許すまじてのひらに土筆
戦争も平和も陽炎の中へ
鰊ぐもり今も昔も戦あり
底抜けに明るい女春の雷

春寒し　西山貴美子

三寒四温しやがんで洗ふ素焼鉢
地球儀に微塵のあそぶ春燈
一の松も肘張つてをり春の風
春寒し輪郭だけの父が立ち
春日傘三途の川で引きかへす

さくら　波多野寿子

糸ざくら雅楽流るる城仰ぐ
天界の友はいづこに花曇
落花しきり搦手門に水の音
石垣を映すお堀や夕ざくら
夜ざくらの天に古雅なる天守閣

さくら　星野和葉

花吹雪追ひし子らの目明日を追ふ
新車輛のデビュー落花の駅を発つ
あのことは白紙に戻さう飛花落花
花冷えや受けてしまひし長電話
花屑をけりて別れし人想ふ

花時　茂木和子

花人に囲まれ猿の名演技
再会は或る日突然花の下
追ひ風にふはと乗りたる残花かな
朝寝する主に蹤きて犬も又
朝寝かな夢の覚め際水の音

春の海　矢作水尾

砂利船の沈み加減や春の海
日と月と同じ空なり若草野
晩春の水脈絹のごと機帆船
春雷やかもめは礁(いくり)奪ひ合ひ
再会の友美しや花の下

花水木　山中みどり

砲火無き空の蒼さや花水木
遠国の終戦を祈る春の雲
健やかに老いたる幸や駒鳥来
花水木利き手に受くる和三盆
桜餅抱へ桜橋渡りたり

池灯籠　柚木治子

アイロンのすべり良き朝囀れり
悲話聞くやライトアップの糸桜
池灯籠風が舵取る花筏
花冷の夜を絢爛と咲く大樹
道行の舞台さながら桜冷

暮の春　由良ゆら女

八十路にも出口ありけり桃の花
ぷつくりと赤子の頬や蛍いか
蒼天に切手貼つたるいかのぼり
体内の時計乱調暮の春
いつの間に更地に二軒春ともし

春　吉住光弥

生き方に妙手少なし遍路の杖
幕開けの拍子木に似し春の雷
桜満つお抹茶だんご嵐山
喫茶店より昭和歌謡や花の冷え
残照受くことに残花の白光す

メモリー　網野月を

零といふ羽音を聞けば大和の忌
葦牙や水面わづかに押し上ぐる
飛花落花襟の社章の裏返し
春眠やカラスはトタン屋根歩く
饒舌になりし父子や磯遊び

牧の朝　石井喜恵

馬の仔の踏み出す一歩牧の朝
母が好き風も大好き仔馬跳ね
縄電車のここが終点桃の花
見送りは坂の下まで木瓜の花
陽炎の椅子に忘れし父の杖

春の景　石山かつ子

種池に真珠のやうな気泡かな
鳴龍の残響めづる木の芽晴
家守る二百余年の藪椿
悪女ともなれず山吹見つめゐて
来し方は煙のごとし白山吹

俳句
7月号予告
6月25日発売
予価950円(本体864円)⑩
特別作品『高橋睦郎・三村純也・小林貴子
大特集
素直な下五、意外な下五
▼総論　一句における下五とは……岸本尚毅
▼実作指南　私がこの(下五)に決めた理由
▼鑑賞　この(下五)がすごい
追悼　稲畑汀子
特別鼎談
星野高士×稲畑廣太郎×坊城俊樹
司会：筑紫磐井
令和俳壇新選者：白濱一羊／成田一子
※内容は変更になる場合があります。
電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。
発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

季音月

万愚節　藤澤喜久

駅ピアノ弾く人聴く人春の宵
ロボットに心盗まれ半仙戯
科学者も木偶も舌出す万愚節
四月馬鹿褒められたのは犬・私
老い二人生きる音のみ菜種梅雨

鞦韆　大場順子

花占ひ最後は「嫌い」四月馬鹿
ネックレス置き花冷の指耳に
花冷や口の欠けたる白磁壺
鞦韆になびく黒髪飛天めく
囀を連れ托鉢の僧若し

思惟の指　梅澤佐江

囀りの樹下に結婚相談所
沈金の椀の華やぎ祝(ほぎ)の春
みどり児の乳吸ふ力竹の秋
風清し優駿駆くる若草野
春深し弥勒菩薩の思惟の指

春の蕾　松井由紀子

音ほどは高くあがらず紙風船
お揃ひのリボンひらひら桃の花
縁先に座蒲団二枚桃の花
晩春やものやはらかにご挨拶
里訪ふて所在なげなり春の雷

桜鯛　森川義子

大甕の水に綾なす朧月
定年の労をねぎらふ桜鯛
天守にも瀬戸の潮の香風光る
忠魂のその碑とりまく面影草
野仏の天蓋となる葉山吹

春深し　山田美佐尾

白壁の続く坂道桃の花
春雷や学生服の金釦
若草やかつて皇居に近衛兵
伊勢路来てまほろばの里春深し
果実酒の甘みの増して春深む

八百比丘尼　丸山マスミ

八百比丘尼祀る小字や桃の花
木瓜咲くや地図より消えし母の里
若芝に寝て大空を独り占め
風染めて足元染めて芝桜
春雷一閃水面に鰷の走りけり

長閑　内田恵子

春の雷錆びし蹄鉄掛くる柵
メレンゲを飾る洋菓子花辛夷
のどけしや爪のひとつを塗り忘れ
孵化するを待つているかに大朝寝
献血の年齢制限残る花

暮の春　森本早苗

櫻大樹渾身の意地見せてをり
スニーカーの紐取り替ふる暮の春
逢魔が時無風を揺るる紅枝垂
記念樹の桜に添ふる親心
揺るぎなき城の石垣柳絮飛ぶ

移ろひ　鳥羽和風

酒ちびり蕗味噌ちびり愛ちびり
つばくらや川を境に寺ふたつ
頭が高い控へおろうや葱坊主
夏めくや榎高からず低からず
街薄暑盲導犬の眼に力

引詰髪　渡辺舎人

園児らは園児の友愛ポピー揺れ
交通指導へ手招きの車入学児
鬱金香婚を間近の引詰髪
表札に別姓三人薔薇の門
春昼の鯉や影曳く飛行船

春が来た　井口俊晴

野遊びへスマートフォンを携へて
遙かなる山並眺め青き踏む
故郷は字のつく村遠霞
囀や恋の鞘当て枝の揺れ
擽られ果ては抓られ朝寝かな

ウクライナ　荒井倶子

踏青や跳べさうで跳べぬ堀の巾
青き踏むラジオは昼の歌謡曲
大霞どろんと消えしノッポビル
飯蛸や明石海峡光もつ
鳥帰る遥か彼方のウクライナ

元婦長　町野広子

つくし摘む太き声持つ元婦長
春雷の机上に歳時記水一本
オスプレイ陽炎ひながら飛び立てり
陽炎に攫はれさうなベビーカー
村々に名木ありて春の昼

春惜しむ　高島寛治

桃咲いて双子の眠る乳母車
春惜しむ渡船の速さは歩みほど
惜春や小魚残る潮溜り
ふらここや漕いで発見新天地
ふらここや幾度も見たり地平線

遊ぶ鴨　井上燈女

利根川の入江明るし花菜風
牛の仔の光あつめて草を食む
種浸し千の泡生む小さき音
本堂から御詠歌流る竹の秋
残り鴨水くしやくしやに遊びをり

のりつけほうせい　霜中冬至

ハウス栽培苦節三年梨の花
飾り方知る由もなし武者人形
どうしても勝てぬ阪神余花落花
また一戸空き家となりて夏桜
母の日やのりつけほうせい啼きにくる

花の雨　松宮保人

野良帰り摘みし野蒜の酢味噌和へ
焼栄螺磯の香りの泡を吹く
貰はれて行きし子猫や残る猫
四阿屋の咽る句作や花の雨
母仔馬纏はり遊ぶ牧の暮

余花の里　池田雅夫

初夏のかをり充満したる森
新緑のさ中へ体を投げだす風
衣更へて内なる決意悟らるる
方形の洋館の街薄暑かな
人体（にんてい）に惚れて移住す余花の里

山桜　上戸千津子

春深し須磨に平家の鼓動聞く
風騒ぎ狭庭を散らす山桜
諦めた源平桃の後れ馳せ
裏山は風音ばかり朝霞
山頂に囀り聞くや穴太積み

時は春　松山清子

時は春身ぬちの濃き血とくとくと
奇声放つゴリラの孤独花吹雪
読み返す時代小説江戸も春
春惜しむひとり立ちせむ親も子も
凛として新入社員ドアを押す

チューリップ　野口和子

退職の教師咲かせるチューリップ
老木も若木もさくら桜山
春霞火葬待つ間の浅間山
行きずりの人と愛で合ふ桜道
無事終はる会計監査柏もち

ブーメラン　川崎道子

石庭の波に溺るる花の屑
桜蘂降る孔雀は羽を折りたたむ
暮の春使はずじまひの蛇の目傘
原稿に数多の朱筆暮の春
暮の春戻ってこないブーメラン

春の雪　西浦千枝子

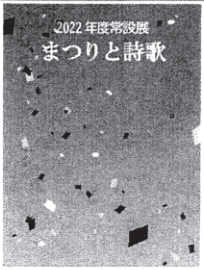
春の雪施錠してある宮の橋
沈丁花大邸宅に老い二人
桃の花眼ピンクに染まるまで
山桜へ猟犬繋ぐ男振り
爺と婆子守忘れて花に酔ふ

赤城山　松本光子

駈けまはる仔馬を追ふよ母馬も
そつと見る仔馬乳飲む息づかひ
春駒の明日を信じひと撫です
麦青し昼餉持ち寄り笑ひ声
麦の穂の真つ直ぐ男赤城山

☆　☆

日本現代詩歌文学館は、
全国で唯ひとつの詩歌専門の総合文学館です。
日本の明治以降の詩歌資料を
有名無名にかかわらず収集・保存し、
様々な活動をとおして
詩歌の現在を発信しています。



詩歌のことばを通して、
多様なまつりの場を共有したいと思います。
（2023年3月12日まで）
◇ ◇ ◇

主なイベント開催予定

古典文学講座　5～6月
こどもの俳句教室　6／10月
俳句入門講座　7～8月
こどもの詩のワークショップ　8月
短歌入門講座　8～9月
第19回俳句まつり　11月
俳句実作講座　1～3月

第37回詩歌文学館賞

【詩部門】
田中庸介
『びんくの砂袋』（思潮社）

【短歌部門】
志垣澄幸
『鳥語降る』（本阿弥書店）

【俳句部門】
遠山陽子
『遠山陽子俳句集成』（素粒社）

◇ ◇ ◇

〈贈賞式〉
5月28日（土）15時～
日本現代詩歌文学館 講堂
＊開催予定。最新の情報は、ホームページ等でご確認ください。

日本現代詩歌文学館
024-8503 岩手県北上市本石町2-5-60　Tel 0197-65-1728　Fax 0197-64-3621
URL https://www.shiikabun.jp　E-mail shiika@shiikabun.jp

〔開館時間〕9時から17時
〔休 館 日〕12月から3月までの月曜日および年末年始
〔入 館 料〕無料

季音花

新調の上着　日高道を

新調の上着をそつと春の芝
モナリザの微笑の中の春愁
夏近しむすめ母似の耳年増
少年は悪事を知らず蘆の角
戦争と平和のあはひ鳥雲に

巣立ち　青木鶴城

下宿屋の四年の埃雁帰る
約束の改札口へ春の昼
ハンドルを切れば二列に花水木
割烹着の女将おしやべり鰆刺
獣には獣のいのち朧かな

若緑　大塚茂子

鳩を抱く少女の像や緑立つ
緑立つ風ゆるやかに御用邸
晩春や船すれ違ふ隅田川
空知野は見渡すかぎり麦青む
恋の日の波音今も桜貝

故郷　近藤徹平

故郷の目抜きをちこちぺんぺん草
木の芽風戦争ごつこせし古墳
春日和スタンド響むホームラン
藩校をしのび飛び石濃山吹
若鮎や四万十川の沈下橋

篳篥　野田静香

篳篥（ひちりき）に言霊を乗せ春の闇
子どもと大人の境目春愁
木洩れ日のガラス工房春の昼
頼もしき二代目女将蘆の角
御食ひ初め小さき器の桜鯛

数の子入り　福田千春

囀や擽ったく聴くラブソング
おすとめす当てつこ鰊焼けるまで
網元の栄華知る母にしん買ふ
囀虚し荒地に鳥の影もなく
ひよろ長き土筆となりぬ塾隣

若草の息吹　井上玲子

枝振りは天下を制す老桜
今生の幸せを背に花の下
若草の息吹に命昂りぬ
花曇り前頭葉の怠け癖
渡し舟春深みゆく水の照り

四月馬鹿　正木萬蝶

ノンアルコールビールワインや四月馬鹿
天罰と思ふ春雷きみ恋ふれば
彼のひとの字愛(あさな)しや春灯
囀の木の天辺の孤独かな
桜前線追うて追はれて狂詩曲(ラプソディ)

鶯張り　熊倉千重子

邪心など無くてすつくとチューリップ
花ぐもり鶯張りの音こもる
再会は桜ふぶきの其の下で
春星のうるむ一つを句友とも
トランペットの響き切なく春の星

囀　石田慶子

囀や別れ話を聞くベンチ
囀や桂子・好江の撥捌き
初めての漢字の名札入学す
ランドセル見せに来し子の卒業す
辛夷散りファイトの声の遠ざかる

松の芯　田中章嘉

蜘蛛の子は母を探しに散りぢりに
過疎に来て草餅貰ふ新世帯
松の芯波音背に植樹祭
二輪車に乗れて笑まふや花吹雪
十二支の中に這入れず亀は鳴く

うらうらうらら　河野はるみ

彼岸会の地蔵に供ふる団子かな
団子屋の煙吸ひ込む春霞
築地塀の割れ目ちやつかり若草よ
蘖の桜に見惚れすつてんころり
囀りてサドルに白き置みやげ

春風　野平美紗子

春風や大和三山見霽かす
抜け道は花大根の細き道
春の夜や琴弾く母の甦る
早や三十年妣に供ふる桜餅
晩春や川辺の散歩日々重ね

花の園　下川光子

ベンチまだ温もり残る花の園
花の雲内ポケットに宝くじ
お目当ての枝垂桜と再会す
一人来て二人となりぬ夕桜
何処にも除菌スプレー養花天

逃げて来い　瀬戸雄二郎

放されて自由は淋しゴム風船
戦地から風船摑んで逃げて来い
紙風船富山より来し薬売り
菜種梅雨ロマンスカーの長汽笛
木曾三川落ち合ふ所浅蜊汁

花の雨　石川理恵

亀鳴くを聞きに亀戸天神へ
花疲れ帰りのバスが未だ来ない
三回目ワクチンの日の花の雨
お気に入りのパン屋閉店花吹雪
風船が空に帰りたがつてゐる

さくら　宮﨑チアキ

白銀の山峰連なり桜二分
靄がかる花天井の路おぼろ
朧朧と花天井の路いづくまで
暮れ泥む鎮守の杜や花明り
夜桜や二つ並びし江戸切子

葉桜　中野彊

廻り道穴場の並木花見かな
ハチ公を守る満開桜かな
枝垂桜下に小さき忘れ靴
旅支度天高くあり花水木
葉桜の静かな朝よ目黒川

新学期　葛城千世子

入学式新たな道を自転車で
スタンプ打つ依頼メールや新学期
太き枝の節に二輪や残り花
葱坊主立ち話する五人衆
でこぼこの大縄跳びや葱坊主

自由の女神像　後藤綾子

ゆさゆさと並木千本飛花落花
男富士乾坤に置き青き踏む
だまさるるふりして終はる四月馬鹿
生きぬきし昭和平成令和春
お台場に自由の女神風光る

種蒔　飛永鼓

ミサイルの抗撃無き地によもぎ摘む
饒舌の富山のくすりや日永し
種蒔いて明日の遊びを考へる
二つ三つ指に遊ばせ種を蒔く
久々の家族旅行や夏つばめ

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2022年7月号

特集 今こそ考えたい ～戦争と俳句
○総論 川名大 ○50句抄出 関悦史
○論考～句に見える、戦争の影 今瀬剛一
○私と戦争 安西篤 池田澄子 中村正幸 松岡隆子 駒木根淳子 照井翠 大谷弘至 生駒大祐

特別作品21句 佐久間慧子
グラビア 俳句界NOW 中村雅樹

特集 未来を担う俳人たち ～10代俳人特集
○特別エッセイ 小林凜 水野結雅 帯谷到子
○10代俳人競詠 谷田部慶太 佐々木啄実 岸快晴 礒部美咲 新谷桜子 若井未緒 鈴木晴 武田奈々 雨霧あめ 日向美菜 馬場叶羽 久留米楠二 山尾玉藻
○私が10代だった頃 行方克巳 辻美奈子 阪西敦子
＊セレクション結社 「海原」安西篤

私の一冊 黒川悦子「ホトトギス」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！ 三浦まり（上智大学教授）

「俳句界」投稿欄 一流選者4名！ 日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

現代俳句鑑賞

網野月を

かつて宮ありし容に春の木々　石田郷子

（『俳句』4月号・陽春より）

冬の間は、判然とは分からなかったのであるが、広葉樹が新緑を付けるようになって、その容を改めたのである。神奈備、または鎮守の杜というのか、既に社は朽ち果てて無いのだが、その社跡を囲むように今でも杜があって、その木々は春の様子を見せていると解した。中七の「容（かたち）」とは、宮を容しているかたちという意味であろう。

朝日出て氷柱の中の星は春　阿部誠文

（『俳句』4月号・春立つころより）

季語は四つの季節と新年の五つに大別されるのだが、気温の変化に先行して、光の世界は既に冬から春の兆しを示しているということであろう。筆者は決して季重なりとは解さない。季語同士が相互を認め合い他を受け容れているという構成である。作者は積極的にチャレンジしているように思われる。他に「黄椿や蕾の上の時雨雪」がある。

遠雪崩杉の鋸屑匂ふなり　後藤章

（『俳句』4月号・十二句より）

新木材の匂いはまたとなく快いものである。当然のように「杉の鋸屑」もよい匂いがあるのだが、改めて「匂ふなり」と確認したということである。上五の季語「遠雪崩」の季、つまり春先の趣の中でのことである。冬の間に小鑓に集積された材を筏に組んだりして川を下ろうというのだろうか。他に「春障子開いてぼんやり家の内」がある。

木の声のひときは高し成木責　太田土男

（『俳句四季』4月号・巻頭句より）

座五の季語「成木責」の風習が残る在郷がまだ各所にある。所に拠っては「生木責」「木呪（きまじない）」「木を囃す」とも言ったりするようだ。中七の「ひときは高し」とあるから大きい声の方がご利益が多いのであろう。小正月の祝事の様子が肌感覚で伝わってくる。

両の手に掬ひまた撒く花の塵　加藤耕子

（『俳句四季』4月号・花より）

花びらが散り、こんもりと敷いている様子である。「掬ひまた撒く」ことの遊びを楽しんでいるのである。作者ご自身と言うより、幼子の所作を見ている作者を想像した。幼子の何度も屈伸して「両の手に掬ひ」「撒く」愛らしさが表現されていて「塵」と言いながら作者は「花」の有難味を堪能している。他に「馬術部の厩舎馬居ぬ花吹雪」がある。

神に仕へて神苑のかほよ鳥　武藤紀子

（『俳句四季』4月号・西国の春より）

座五の季語「かほよ鳥」とは、貌よき美しい春の鳥の総称であろうか。諸説があるようではあるが。作者が鳴声を頼りに振り向けばそこには確と鳥影を見つけたのだ。振り向く契機になったのだから、姿だけではなく鳴声もさぞ美しい鳥であったのだ。他に「中将の面をつけて春憂ひ」がある。

春隣ペンキ太りの柵塗りて　中西夕紀

（『俳壇』4月号・指の体操）

「ペンキ」の語感に春の訪れを感じる。加えて「ペンキ太り」とあるからには、何度かペンキ塗りをしているのだろう。職人の仕事ならば、予め鑑掛けなどをして、塗り面を形成するのだが、余程酷い状態でなければ、日曜大工のそれは上塗りしてしまう。蔓などに葉が出る前にする仕事なのである。他に「風邪の日は指の体操でもするか」がある。

世の隅の思郷にも似て花八手　佐怒賀正美

（『俳壇』4月号・去来抄（一）より）

「花八手」は何とも不思議な花である。宇宙空間の生物のような形態である。もしかしたら人類以前の生物の形態を残していると言っても良いかも知れない。物陰に植えられることが多いのだが、他に花の少ない季節に咲くので、大いに目立つのである。「思郷」を誘い出すくらいに人には身近な存在である。他に「凩やまだ生半な自覚の詩」「恐竜と怪獣あそぶ柚子湯かな」がある。

春の木や戦場に名をなくしつつ　水野真由美

（『俳壇』4月号・名前のない木より）

上五の「春の木」はお題から想像するのに銘木ではないと考えられる。というよりも、ある意味で若木を連想させるものがある。嘗て戦争を経験をした国々、今現在戦禍を被ってる国や地域をどうしても思い浮かべてしまう。筆者は、反戦の願いを込めた句と捉えている。

鏡面のガラスの家の夏籠り　高橋修宏

（俳誌『五七五』9号・オリンピアより）

「夏籠り」に一種の閉塞感を覚えるのはここ数年来のコロナ感染症の蔓延の所為であろう。本来ならば、隠れるだけではなくて祈りの要素も含めて解釈しなければならないところであろう。上五中七の「鏡面のガラスの家」は、都会の数多の建物を叙景したものであろうと自分勝手に読んでみた。他に「紙なべて折鶴となれオリンピア」がある。

『水明誌』を繙く（水明四月号）

宮崎斗士（『海原』副編集人・現代俳句協会顕彰部長）

辛夷咲くや光とらへて伎芸天　田寺玲子

伎芸天とは「芸能」を司る女神。インドのヒンドゥー教の最高神・シヴァ神である大自在天が天上で天女たちに囲まれて歌や舞を楽しんでいたところ、突然大自在天の髪の生え際から生まれたのがこの伎芸天だという。その姿は殊の外美しく、軽やかな天衣と金銀真珠で身を飾り…芸能だけではなく、まさに「光」をも司っていたのでは、と思わせる趣ではある。春の日差しに煌めく花辛夷の風情に、伎芸天の姿を認めた作者のセンスと詩心に感服の一句だった。

そういえば昔、ある俳句の大先輩が「光をうまく詠めるようになれば、俳句作家として一人前だ」と仰っていた―。

「光」をモチーフとした作品では、他にも、〈陽の光ながれ雨水の瓦屋根／菊池ひろこ〉〈崩れ咲く花に瑞光寒明くる／茂木和子〉〈石垣に陽をたつぷりと花いちご／野田静香〉〈冴返るリアウィンドーの乱反射／正木萬蝶〉〈早春の雫眩しき切通し／下川光子〉〈軒つら窓辺に無垢の光降る／神田治江〉〈少年の眸かがやく寒稽古／鳴海順子〉〈オリオンの光零るる鎮守杜／小山敦子〉などに共鳴。

春立つや爪よく伸びる薬指　福田千春

オミクロン株の脅威に加え、ロシア軍によるウクライナ侵攻―。そして個人的には、昨年から今年にかけての何名かの俳句仲間の逝去、とりわけ昨秋の二十七歳の俳句仲間の自死に大きな衝撃を受けた。「命」というものの危うさ、脆さとシビアに対峙している今日この頃である。

そんな中、掲句に立ち止まり、ふわり心和らぐと共に、あらためて「今生きていることの尊さ」に思い当たった。こういう小さなささやかな一コマの積み重ねがまさに「生きている」ということなのだと実感……。春の訪れが作者の（そして読者の）背中をそっと押してくれているかのようだ。

他にも、〈抱き上げし赤子のふぐり梅の空／西山貴美子〉〈水辺より春の胎動泡一つ／由良ゆら女〉〈今日からは春の木となり天を衝く／網野月を〉〈切り身でも弾む寒鰤もらひけり／橋本京子〉〈息白し今ここにゐる新しさ／吉川拓真〉〈過疎村に男子誕生初霞／渋谷きいち〉〈未知の夢をぎゅつと詰め込む初暦／湯浅和〉など、命の輝きに満ち溢れた作品の数々。混迷の明日を生きるための大きな力を頂いた。

俳誌望見

梅澤佐江

『天塚』　令和四年三月号　通巻二六六号
主宰　宮谷昌代　発行所　京都府宇治市

昭和五三年一月、木田千女が城陽市で創刊。師系鷹羽狩行。「俳句即人間道、一句の底に流れる愛の調べこそ俳句」を理念とする。（隔月刊）

主宰詠「室の花」一七句より

欄干の手にざらざらと冬ざるる

日光や風雨に曝された欄干に触れた手のざらざらとした手触りから、冬の荒れ寂れた季節の到来を実感する作者の皮膚感覚と繊細な感性。

声明の沁み込んでゐる大根焚

十二月九、十日、京都鳴滝の了徳寺で行う行事。親鸞上人がこの地で法を説いた際に、人々が帰依して毎日大根を煮て奉ったという故事に因んで、庭先に大釜を据え大根を焚いて参詣者に供するのだが、この法要で僧の唱える声明が大根にも沁み込んで、無病息災を願い訪れた善男善女に御利益と御加護の有らんことを。

十一月八日静かなる雨の朝

八〇年前のこの日は日本が米国に宣戦を布告した太平洋戦争の開戦日。しかし今日は物音も消える程の静かな雨の朝、再び戦禍の無い平和が続く事を願わずにはいられない作者である。

初鏡瞳の奥に見ゆるもの

正月初めての鏡に向かって化粧をしている。鏡に映る自身と向き合う時、来し方を顧みつつこれから成すべき事は何であるのか、又夢の実現への強い意志をも鏡の中の瞳の奥に確信したのであろうか。

わがための座椅子がひとつ室の花

和室で終日書き物をされる日々、疲れたら凭れてリラックスする為のご自分専用の座椅子が一台、部屋にはシクラメンが明るさと潤いを添えて寛ぎの空間でもある。白障子越しに新春の柔らかな光が部屋全体を包み込み、作者の佇まいと相俟って静謐な時間がゆったりと流れて行く。

勾玉集　同人　主宰選　二五名　各七句より

志記す白寿の年賀状　向井久子
姉川の蒼天を衝く鷲一羽　竹村良三
ぷかぷかとぽかぽかとゆず湯かな　前川美智子

管玉集　同人　主宰選　三四名　各六句より

猫先に帰つてをりぬ暮の秋　前田みき
どこにでも誰にでも来る大旦　岡本のり子
散る銀杏養護施設は元母校　能勢　勇

白鷺集　主宰選　四三名　各五句より

冬の日を鞄に揺らし下校の子　金　糸雀
落葉踏む足裏に聞く森の声　金森友子
思ふまま生きて八十路や数の子食ふ　多田ゆき

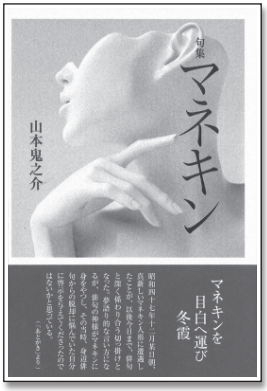
令和四年新年俳句大会は、「天塚」主宰及びゲストの「鳰」「鳳」「朱雀」の各主宰による特選、秀逸、入選の選と評がなされ、華やかで活気に満ち、盛況を博した事と拝察する。

特集

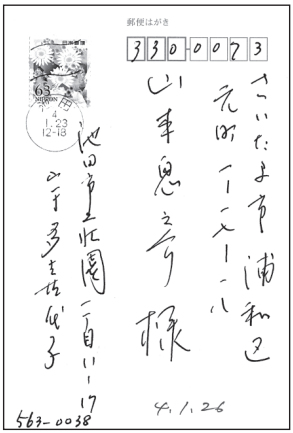
山本鬼之介

句集「マネキン」

鑑賞

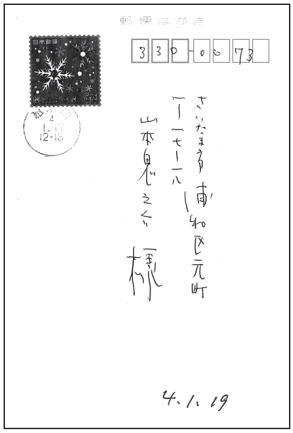


『草樹』代表　宇多喜代子 様　からの葉書



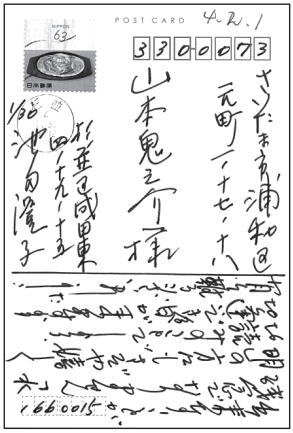
大寒のさ中お寒い日がつづきます。
お変りなくお過しのことと存じます。
この度御句集をありがたく、まず第一句集であることにびっくりでした。
いつもの道いつもの人に春の雪
この句をはじめ好句数多を味わいつつ拝見いたしました。
時節柄どうぞ御身御自愛下さい。
ありがとうございました。
とりいそぎの御礼までに。

『岳』主宰　宮坂静生 様　からの葉書



このたびはご本『マネキン』をご恵与いただきありがとうございました。
ご上梓おめでとうございます。
ぎっしり詰まったご句集拝受。これが第一句集とはお見事。しっかり拝読したいので、只今のところぱらぱら全体を見ての寸感で恐縮です。明解な骨太なご句。さすが三橋敏雄の影響大。私も長い間〈湘子・敏雄〉のルートに加わっていたことあり。お二人の作句の影響を受けましたご句たのしみ。「二月三日はブルドッグ」の句集巻末の句に注目しました。偶然の出会いこそ人生の醍醤味。ご家集はこの一語の魅力いっぱい。どうぞお元気で。いろいろのところでご句紹介させていただきます。

『豈』同人　池田澄子 様　からの葉書



思いもよらない世の中になって二年も過ぎました。
『面』の句会のあの日々が夢のようです。
句集『マネキン』、読ませていただき有難うございます。紫黄先生が羨ましいと仰しゃりそうな装丁で、先ずたのしくなりました。先ず巻頭の句の「三月」の明るさと「避雷針」の持つ複雑な怖さが見事だと思い読み進み、紫黄先生にお見せ出来ないことが残念でなりません。『水明』の方々にもさぞや嬉しくお読みのことでしょう。お逢いできる日がきますよう。
有難うございました。　　かしこ

「天為」顧問・「豈」同人

大屋達治様からの手紙

拝啓

お健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。

このたびはご家集『マネキン』をご恵送にあずかりありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

初めてお目にかかったのは、昭和四十八年（一九七三年）、鬼之介様が三十五歳の働きざかり、私は二十一歳の若僧でございました。六～七月ごろです。代々木上原の公民館？の三階の会議室（エレベーターなし）での「俳句評論」の句会でした。私が紫黄兄上の

老鶯のうぐひすぶりを聞くばかり　紫黄

を、若気の至りから酷評したので、兄上様から『ヒドイヒドイ』と言われたのを覚えております。

今となっては、なつかしい想い出です。そのご舎弟鬼之介様が「水明」の主宰に就任されたという話は『俳句』のニュース欄か何かで知りました。長谷川かな女―長谷川秋子―星野紗一―星野光二と続く老舗結社の五代目になられているのですね。星野家から山本嵯迷家への「大政奉還」だなとも思いました。

その鬼之介様が第一句集とはおどろきました。この長い年月の賜物と一読で済ます訳には参りません。ゆっくりと拝読させていただきます。

私の方は、『俳句評論』をやめて二～三年俳句から遠ざかりましたが、摂津幸彦の『豈』に拾われ、山口青邨没後、有馬朗人の『天為』創刊に参画、三十年して朗人が令和二年に没後、『天為』の集団指導者の一人として運営に加わっております。

俳句というのはなかなかにやめられない文芸だと存じます。名刺代わりというには失礼ですが、七年前に出した俳人協会の自註句集を同封いたしました。ご査収ご笑覧いただければ有難く存じます。

コロナ禍の折、くれぐれもお身体お大切になさいますように。取り急ぎの乱筆にて失礼いたします。

不盡

令和四年一月二十六日

大屋達治　拝

山本鬼之介　様　机下

評論家

坂口昌弘様からの鑑賞文

心の奥の秘境―『マネキン』鑑賞

座右の銘は「独立独歩」雲の峰
マネキンを目白へ運び冬霞

山本鬼之介は昭和十三年に東京都に生まれ、三十三歳の時に「水明俳句会」に入会し、八十歳の時に第五代主宰を継承している。

『マネキン』は主宰後に上梓された第一句集であるが、序文も跋文もなく珍しい。

「水明」は昭和五年に長谷川かな女が創刊し、今年で創刊九十二年となる歴史を持っている。私は「俳句界」の連載「絆　俳壇夫婦対談」で、第四代主宰の星野光二と妻の俳人・星野和葉の対談の司会を務めた経験がある。その時の光二の発言の中に『水明』は反伝統でも反新興でもなく」「自由で個性的な」句を作るという言葉がある。鬼之介の引用句の「独立独歩」を読み光二の言葉を思い出した。

「マネキン」の句への三橋敏雄の句評が句

集に転載されているが、まさに自由で個性的な句である。三橋が「面白さを定かに解説するのはまことに困難」だというように、作者の俳句は解説することが野暮であるように思われるがあえて鑑賞を試みる。

くろがねの匂ふ水こそかな女の忌
全集の五年目の白かな女の忌
夢でかな女と令和を語る目借時
年頃のかな女の写真秋の昼

句集にはかな女を数句詠んでいる。夢の中でかな女と令和の時代について語るというのは作者らしい夢のような発想である。

よいとまけの声なき昭和霜柱
のらくろの居りし昭和よ春の星
残雪や時よ遥かに赤軍派

句集の特徴の一つは昭和の古き良き時代の回想である。美輪明宏の作詞作曲した「ヨイトマケの唄」は作者が二十八歳の時のヒット曲である。田河水泡の漫画「のらくろ」は戦前戦後に長く続く人気であった。日本赤軍は昭和四十六年ころから多くの事件を起こした極左組織である。当時の事件についての作者の思いは俳句からは分からないが、「時よ遥かに」の思いは昭和に過ごした読者には同じ思いを喚起させよう。中村草田男の〈降る雪や明治は遠くなりにけり〉のような思いに相当する。

朽ちてなほ王の剣ぞ青嵐
草薙の剣の國ぞ青嵐
「村正」の刃文が招く春の雷

作者はなぜか「剣」「刀」に関心を持っていることを表す句を詠んでいるが、他の俳人に類句がない。「草薙の剣」から天皇家の三種の神器の刀を思わせる。神器の中の刀と銅鏡は古代中国においても王・皇帝の神器であったから日本の天皇の象徴となっている。優れた刀が「雷」を「招く」ように、古代道教では、刀や鏡が神の霊を招き邪霊を祓った神具であり、日本の天皇家の神器となった。「神」の漢字のルーツは「雷」であったから、作者の句は古代の漢字の起源を暗示させる。

祷りて癒ゆる病は何ぞ棕櫚の花
幣に春風祈願の中身らちもなし

新型コロナウイルスがなかった時代の句であるが、いかなる病気も神仏に祈っても治らないことを思わせる。しかし一方、病気になった時には神に祈り、あるいは仏像に祈願せざるをえない人間の弱さをもっているため多くの宗教が今も存在している。作者の信仰や宗教観は句集からはよくわからないが、神仏に関する句が少なくない。

夏霧や護符の真神の吠ゆる峰

「真神」といえば三橋敏雄の〈草荒す真神の祭絶えてなし〉〈絶滅のかの狼を連れ歩く〉を連想させる。『万葉集』には「大口のまかみの原」という言葉が見られ、狼が「まかみ」として恐れられた。江戸時代には秩父の三峰神社と青梅の武蔵御嶽神社で狼を神の使いとする信仰が盛んとなり、「お犬」「お犬さま」とも呼ばれ全国に広まった。『狼の民俗学』によれば、中国や朝鮮半島からもたらされた虎の民俗が民間に伝わり狼の民俗に変容したという。護符というのも中国の道教から日本の神道に伝わったものである。護符は三橋の俳句であろうか。

天の磐戸を開く力ぞ初神楽
神の名を読めぬ者共はつまうで
若水を高天原の神神へ

神々に関する句である。

初神楽で作者は「天の磐戸を開く力」を感じている。また二句目では、「神の名を読めぬ者共」が多く初詣をしていると詠む。アイロニーであろうか。日本人は神社で拝んでも神社の神の名を知らないし、神の名を聞いてもそれがどういう神か知らない。寺に詣でても、その寺がどういう仏教の宗派かまた仏教の思想も知らず寺社に詣でる。

作者は若水を天の神々に捧げる気持ちを持っているようだ。

初夢や得難きひとの膝枕

拙宅にいま妙齢の枝垂梅

無粋にも乙女椿を囲ふ塀

夢二画に似たる女と長き夜を

夢二画のをんなと過ごす小春かな

鉄線を咲かせ勝気を解くをんな

句集には女性を詠んだ句や植物が女性を思わせる句が少なくない。

女性の膝枕の姿は、夜に見る夢であろうか、あるいは作者の願望であろうか、また、あるいは実体験であろうか、読者の想像をかりたてる。妙齢の枝垂れ梅や乙女椿は現実の女性を思わせる。夢二の絵に描かれている女性が理想であろうか。夢であろうか、現実の体験であろうか、読者の空想を駆り立てる。

日頃は勝気であるが鉄線の花を咲かせるほどの優しさのある女性が理想であろうか。

現代の俳人はあまり異性への思いを俳句に詠まない傾向にあるが、作者は「艶」の思いを正直に詠む。

四次元へ行ける気がする大花野

郭公や方程式がまだ解けず

探梅や心の奥の秘境まで

作者は不思議な世界を詠む。

大花野の中にいれば四次元空間に行く気がすると詠む。現実に満足できない人生観のようだ。方程式は人生の方程式だろうか、あるいは俳句創作の方程式だろうか、人は誰でも、一生かかっても説けない問題を持っている。

作者はいつも心の奥に解けない方程式を抱えているようだ。解ければそこは桃源郷となるかのようだ。この世の自然の梅の花を求めることが、俳句という有季定型の方程式を解くための人生であるようだ。

☆　☆

他誌転載

「俳壇」二〇二二年五月

俳壇時評

五七五と七五調

仁平　勝

わが国の古典的な韻文は、五音と七音を組み合わせた音数律として成立してきた。いまあえて「韻文」と書いたのは、それは「詩」ではなく「歌」と呼ばれていたからだ。

万葉集の長歌は、五七律の繰り返しであり、ここですでに五七調の音数律が出来上がっていたといえる。長歌に付く反歌の五七・五七・七という音数律は、そのまま短歌の定型となり、これがやがて五七五・七七の上句（かみのく）・下句（しものく）という構成として意識されてくる。そしてその上句が、連歌の発句として自立し、五七五という新たな定型が生まれた。すなわち俳句の母体である。

それとは別に、七五調の系譜というのがある。十二世紀の歌謡集『梁塵秘抄』で（「遊びをせんとや生まれけん…」の歌がよく知られているが）、この時代には七五調が定着していたことが分かる。各地の民謡なども基本的に七五調であり、これはいわば歌謡の音数律として、浄瑠璃に代表される近世七五調に

つながっていく。それをここで「俗謡のリズム」と呼ぶことにする。

私はいま、五七五という俳句の定型律が、七五調とは別の系譜にあることを述べてきた。さらに付け加えれば、俳句は七五の韻律を繰り返さないことで、俗謡のリズムと一線を画している。けれども同時に、俳句の中七下五が、七五調と同根であるのはいうまでもない。

ここまでは話のマクラである。そこで本題に入ると、このたび私は、山本鬼之介句集『マネキン』（文學の森）を興味深く読んだ。どこに興味を引かれたかというと、作品に俗謡のリズムが感じられることだ。マクラがだいぶ長くなったので、早速こういう句を引いてみる。

葦原へ手柄を立てに蟻の列
堅炭や三代前は町火消
猫の恋むかし夜盗も屋根伝ひ
築山は高さ競はず赤蜻蛉
一寸見は十三七つ初化粧

これらの句が俗謡のリズムを感じさせるのは、いかにも俗謡ふうの言葉が使われているからだ。つまり作者は、俗謡のリズムにじゅうぶん意識的だと考えていい。

どの句も解釈は不要と思うが、たとえば一句目の「葦原」は、葦の生えた野原などではない。古事記にいう「葦原の中つ国」つまり日本のことだ。あるいは、例の隠語として読めば破礼句になる。そのほか「町火消」や「夜盗」が出てくるし、「十三七つ」とくれば、これはもう俗謡そのものである。

さらに四句目と五句目には、その上五に格助詞の「は」がある。一般に俳人の嫌う助詞だが、これもやはり俗謡の語り口といっていい。

馴初めの頃の花野にいま独り
明朝の眉唾物に冬の蠅
内弟子の伏し目の応へ春の雷

もう三句ほど引いてみた。ここでは俗謡のリズムに加えて、言葉に省略が効いている。省略は俳句表現の根幹として、五七五の韻律と切り離せない技法である。

一句目は、「馴初め」と「独り」という二つの言葉で、これが亡き妻を偲ぶ句であることが分かる。ただし、淋しい句ではない。「馴初め」という俗謡調の言葉が、そういう感情を消している。

二句目の「明朝」は、陶器のことだ。中国の骨董でその時代の物だといわれたら、まず「眉唾物」と思っていい。そこに「冬の蠅」が止まっているのが可笑しい。

三句目は、「伏し目の応へ」という中七で「内弟子」が女弟子と分かる。「春の雷」は、胸のドキドキ感というところか。その相手は、まあフィクションとしておこう。

さて、そろそろ話の結論に向かいたい。先のところで、俳句は「俗謡のリズムと一線を画している」と書いた。山本鬼之介は、その「一線」の内側で、意図的に俗謡のリズムへ接近している。それはすなわち、俗謡に惹かれる自身の通俗性を対象化するということだ。

もう一つ先のところで、連歌の発句が俳句の母体だと書いた。けれども俳句の五七五は、そのまま連歌にはつながらない。いうまでもなく、俳句の前身は連歌から派生した俳諧（俳諧連歌）の発句である。連歌と俳諧の決定的な違いは、滑稽という俳諧のモチーフにある。それは連歌の「雅」に対する、「俗」というアンチテーゼといっていい。滑稽とは、通俗性を対象化することにほかならない。

『マネキン』の作品は、いわく滑稽である。つまり俗謡のリズムによって、俳諧という滑稽文学を引き継ごうとしている。もっとも今日の俳壇では、こういう俳句はあまり評価されないだろう。それは承知で、この一巻を支持したいと思う。

他誌転載
「俳句界」二〇二二年四月
この本この一句　望月　周

炎昼の畑で焼かるる畳かな

『マネキン』は句歴五十年に迫ろうとする山本鬼之介氏の初めての句集。優に八百を超える句数を収める大冊です。長谷川かな女を師系としていますが、句風は多彩です。諧謔や機知に富み創意ある句群が特徴的であり、句集の主調をなしているように思われます。

面白いことに、筆者の印象に最も強く残ったのは、ニコリともせず真顔でひたすら対象を見つめたような一句、掲出した作品です。

炎天下の畑の一角で畳が焼かれています。なぜ畳が焼かれているのか、背景的な事情は削ぎ落とされています。説明を排した迫真の描写に釘付けとなりました。

人の暮しの痕跡である畳が炎に包まれてゆくイメージはとても鮮烈に映ります。余情の深さに只ならぬものを感じました。

この「畳」の句のほか、表題句〈マネキンを目白へ運び冬霞〉〈夕時雨つひに燃え出す炙り出し〉〈時の日や長針だけの園児の絵〉など、句集を通じて、対象に感応する力、着眼点の良さ、つまり柔軟な詩心が思われました。〈入道雲が大和魂背負ひて立つ〉〈墨東やてつぱう百合がデマ飛ばす〉〈春月を食らふ大寺の鬼瓦〉なども同様に自在に詠まれています。

三鬼が叫ぶ紫黄よく来た忠治をやれ

句集一ユニークな作品です。国定忠治の芝居の名台詞が思い起こされます。ニヒリストでモダンという印象が強い西東三鬼ですが、この句の三鬼はとても人間臭く、身近な存在に感じられる描写が出色です。「紫黄」とは三鬼門で作者の兄・山本紫黄。無季であるところに、三鬼が中心的役割を果たした新興俳句運動へのオマージュが感じられます。

昭和十三年東京都生まれ。「水明」主宰。

他誌転載
俳誌「篠」二〇二二年Vol 200
関島敦司

山本鬼之介　句集『マネキン』を読んで

本書は「水明俳句会」主宰山本鬼之介氏の初めての句集である。あとがきによると、「知らず知らず五十年に迫る俳歴に至ったが、（中略）自らの句集には甚だ無頓着であった」とあるが、昭和四十六年以来五十年に及ぶ八百六十句余りの初句集としての集約は一俳人の集大成として大変読み応えがあった。

マネキンを目白に運び冬霞

句集名「マネキン」はごく初期の句から採られた。あとがきで自解されているが、それでもまだ謎めいていて、読み手にとってはかってに物語を展開したくなる。そのあとがきは「昭和四十七年十二月某日朝、真新しいマネキン人形に遭遇したことが、以後今日まで、俳句と深く関わり合う切っ掛けとなった」とあるが、豊島区目白でのマネキン人形運び人にとって、当時の冬霞はスモッグもひどいものだっただろう。

山眠り伸ばしてみたる乳房かな
梧桐やキネマのやうに振り返る
白魚に一升枡の曲り角
マンホールを出ててつくづく天高し
遠汽笛聞いて前進かたつむり
鎌切の後ろ姿よ燕尾服

句の中の「もの」を絶妙に季語と対比、取り合わせして句意を表わしている。季語以外の「もの」を介してそれでも全部は言わずに

読み手に考えさせる。マネキンの句も同じで面白みがある。

朝霞むかし歓呼の声の駅
ぶらんこに居れば母なき少年期
転生を思ふこのごろ草雲雀
千住葱を嚼めば現に兄ちゃ人
泣くことを赦さぬ母よ冬薔薇
分隊長の兄の遺影や花ぐもり

昭和十三年生まれの筆者の履歴、境涯が垣間見られる句を探し、背景を推察してみた。句集中にこの種の句はきわめて少ない。それだけに一句一句が深くて真に迫ってくる。

おわりに「マネキン」の句に戻ると、筆者はあとがきの末尾で「彼のマネキンに再会できる日を鶴首して……」と結んでいる。これでもまだ謎は解けないが、「彼」を「か」と読んでみるとひょっとして著者にとっての「マネキン」は「俳句」そのものではないか、とあえて推理すると謎が説明できそうである。併せて、昭和四十八年の『俳句研究』誌「三橋敏雄推薦」にあるように著者の諧謔世界を楽しませてもらおうと思う。

老鶯の一声山の威を糺す
寒潮に咬まれたくなく汽車走る
魂のはしる速さか糸蜻蛉
過去の景連れて来たるや黒揚羽
探梅や心の奥の秘境まで

象徴性が感じられて、おおいに参考にしたい句である。

他誌転載

俳誌「鳰の子」第53号二〇二二年四五月

俳書・句集に学ぶ1

岩出くに男

『マネキン』山本鬼之介　著　文學の森

マネキンを目白へ運び冬霞

「昭和四十七年十二月某日朝、真新しいマネキン人形に遭遇したことが、以後今日まで、俳句と深く係わり合う切っ掛けとなった。

夢語り的な言い方になるが、俳句の神様がマネキンに身をやつし、その当時、身辺俳句からの脱却に悩んでいた自分に啓示を与えて下さったのではないかと思っている。」（あとがき）より

昭和四十八年『俳句研究』三月号にこの句を三橋敏雄氏が評した一文がある。

「―略―「マネキン」人形を運んでいったところ、たまたま辺りは「冬霞」の景であった。というわけだが、それを面白いと思う私自身、面白さを定かに解説するのはまことに困難である。要点は「目白」という特定の土地柄を如何に感受するかにかかわろう。あるいは土地柄について知らなくとも、この固有名詞の文字面が誘う、複合的な情趣の不思議を手がかりにできるならば、マネキン人形とその運び手を媒体にして、かかるカスミの諧謔世界を味読し、共感してもらえようかと思う。」

ながながと引用したのは、この三橋氏の句評が、この句集全体の評でもあることを実感したからである。

龍宮の使者の割符か櫻貝
紙魚どちに歯応へさぞや細川紙
振袖の姉貴が廻す唸り独楽
姐さんの鑽火（きりび）のむかし葉鶏頭
燕にも五代の家格蔵の町
騒音にあらず文化ぞ除夜の鐘

これらの句を読むと三橋氏の評と一致するものが匂ってくる。

また、「目白」に代表されるように固有名詞がふんだんに使用されている。数えると六十句では収まらない。この句集は八百五十

句ほど掲載されているので通常の句集より句数は多いが、それでも固有名詞の多さは実感できる。

市丸の唄に乗つてけ都鳥
曝書の中の手塚治虫の漫画かな
直実の生れし国の大暑かな
伊賀甲賀めぐり根来や冷し酒
三鬼が叫ぶ紫黄よく来た忠治をやれ
寒月へ旗艦三笠の砲門よ

この句集は、江戸っ子の「絆」と「鰡背」に溢れた作品群である。

作者は、昭和十三年東京生まれ。同四十六年「水明俳句会」に入会。平成二十六年「水明俳句会」副主宰。同三十年第五代主宰を継承。現代俳句協会員。

他誌転載

俳誌「秋麗」令和4年4月号

『マネキン』山本鬼之介　第一句集
文學の森　2022年1月刊

「水明」第五代主宰の初句集である。

椎の花屋根にとどかぬ棒ばかり

屋根の上にボールが載ってしまったのか。家にある長い棒をあれこれ持ってきても用を成さない。

つねられて悦ぶ皮や夜の秋

憎からず思っている人をつねっている女性。痛いほどでもない皮膚が悦ぶと詠み、「夜の秋」が艶を添える。

春よ仲人「ざつくばらん」を言ひすぎて

仲人が「ざっくばらんにお話しを」と、緊張をほぐすように促したが、相手への夢が毀れてしまったようだ。

作者は昭和十三年東京都生まれ。昭和四十六年から令和三年までの五十年間の作品から選び抜かれた八四〇句が収録されている。掲出の三句に見られる通り、ものを言わないところに奥行が生まれる省略の詩型を活かした魅力的な作品で貫かれている。巻頭から掉尾まで読者を惹きつけてやまない。

漣や明治の父の磯あそび
薔薇垣になほも佇む事件記者
惜別の車窓の頬よ夜の秋
彼の歌の一本杉のある花野

ある世代だけに通じる句かもしれない。「明治の父の磯あそび」はおそらく着物の裾を捲っているのであろう。薔薇垣から中の様子を窺っているのは張り込みの人。「事件記者」という言い方が昭和のテレビ番組を思い出させる。「惜別の車窓」はモノクロ映画の一シーンのようで懐かしさがある。「一本杉」の歌は昭和三十年に流行した春日八郎の「別れの一本杉」であろう。

新時代の句にも諧謔や写実など、多彩である。

祷りて癒ゆる病は何ぞ棕櫚の花
帆のごときファッションショーの夏帽子
晦日蕎麦二杯健康優老女

「水明」は昭和五年に長谷川かな女が創刊、山本鬼之介が五代目の主宰である。それに纏わる句も味わい深い。

三鬼が叫ぶ紫黄よく来た忠治をやれ
くろがねの匂ふ水こそかな女の忌

「水明」で俳句を始め、山本紫黄の勧めで「面の会」にも入会したという。巻末に、句集名となった「マネキン」の句についての三橋敏雄の鑑賞が付けられている。

マネキンを目白へ運び冬霞

☆　☆

他誌転載

俳誌「山彦」二〇二二年五月
受贈俳書紹介

河村正浩

句集『マネキン』山本鬼之介（水明）

「水明」主宰（昭和十三年生まれ）の第一句集。昭和四十六年「水明」入会。平成三十年第五代主宰を継承。五十一年間の集大成である。

マネキンを目白へ運び冬霞

句集名となった句だが、作者の俳句原点となった句でもある。

夏足袋や一差舞ふも旦那芸
富士額柳腰ゐて涼み舟
袖濡らす夜露も粋に女坂

粋な人というのが一読しての印象である。粋ということは著者が交友関係を深め、豊かな人間性を形成していると言える。

盛り塩に一夜の疲れ今朝の秋
無粋にも乙女椿を囲ふ塀
任地去るホームの隅に雪女郎

粋な人だけに人情の機微に触れた句やユーモアのある句があるが、この三句に注目した。一句目はあまり見向きされない盛り塩を擬人化し。二句目は導入部の「無粋にも」で、何れも俳味ある作品とした。三句目はユーモアというより粋な人だからこその作品と言える。

老鶯の一声山の威を糺す
塗り立ての一の鳥居に初鴉
白鷺にいま一天の曇り無し

静けさの中に新鮮な季節感、繊細な感性がある。

朧より令和の御世へ平家琵琶
白藤に雅なるかな巫女の指

一句目は関門海峡を目の前にした下関市の赤間宮を彷彿とさせる。二句目は繊細である。これら五句はいずれも格調高い詩風と言える。

（令和四年一月二〇日
文學の森　三〇〇〇円・税別）

他誌転載

俳誌「玉梓」令和4年5・6月号
句集の窓

宮田ひさ英

『マネキン』　山本鬼之介

昭和十三年東京都杉並区生まれ。昭和四六年「水明俳句会」入会。現在主宰。

マネキンを目白へ運び冬霞

「目白」という固有名詞とカスミの諧謔世界を味読し共感してもらえたらと、三橋敏雄氏が講評される。

花冷の折目正しき国旗かな
無人駅にも名所案内冬あかね
投げ入れの花の一つに半夏生
胸で聴くちちろ鳴く夜の平家琵琶
花野から花野へ還るブーメラン
幅跳を競ふ童女と青蛙
米搗かぬ水車に絡む枯蔓よ
声援や秋の日傘を高く挙げ
囮めく私道の奥の烏瓜
末黒野にかたちとどむる草の罠
粛粛と谺が還る山始

「山始」の斧の音が新年の山に響く。粛粛が如何にも厳か。景色が大きく広がってくる。

いつもの道いつもの人に春の雪

いつも通る人に今日は春の雪が降って、いつもの人がいつもより美人に見える作者。

俳句を始められて五十年。その間の作品を一冊に纏められた句集は財産に思える。ジョークを交えた句集に作者の暖かさを感じた。

句集 マネキンの一句鑑賞

青木鶴城

しばらくはキャベツの芯を噛みたまへ

何と肩の凝らない面白い句であろうか。この句が詠まれた時代は、列島改造論のもと高度成長の波が押し寄せ、全てにスピードと合理性が求められていた。学生運動がエスカレートして浅間山荘事件が起きたのもこの頃である。何となく若者の心が荒んでいた。

なにも急ぐことはない、一度立ち止まって意味など考えずに暫くキャベツの芯でも噛んでみたまえ、味気ない芯でも噛んでいれば甘みが出る、決して無駄ではないのだ……呟きにも似た自然体がこの時代へのメッセージを込めた奥深いものを感じさせる。

鬼之介主宰の句には色んな素材が使われ、その使い方が絶妙である。タイトルになったマネキンを始め、乳房、騎兵の背筋、よいとまけ、姉様、旅役者、御侠、組の者、鶯張りやこのキャベツの芯等々意外なものが多い。

この意外なものを上手に読者に掴ませるウイットこそ鬼之介俳句の神髄なのである。

網野月を

山眠り伸ばしてみたる乳房かな

上五の季語「山眠り」であるから、乳房の主の年齢も自ずと知れようというものである。筆者の曾祖母の逸話ではあるが、背に負うた子に乳房を伸ばして乳を吸わせたということが伝わっている。こういう事もあるのだろうと思う。当時、句会でこの句を投句した際に骨董屋の主人S.Y.さんの顰蹙を買ったということを作者から伺ったことがある。S.Y.さんは当時、「面」のマドンナ的存在であったようだ。作者の句作に取り組み始めた頃の作である。数年後に「片蔭や洗濯物の乳の部分」を得ている。同じくテーマは「乳」であるが、その「乳」とは、人としての営みをシンボルする最も意味深い人間の身体の部分の一つなのである。三橋敏雄をして「面白さを定かに解説するのはまことに困難」と言わしめた、句集題にもなった一句「マネキンを目白へ運び冬霞」を得た作者が感得した作句の深淵において「乳」はシンボルであり、具象を超えた俳句表現の言説なのであろう。

突堤に鞄一つの夏景色

石井喜恵

一読大海原を背景に、白波立つ突堤に佇む男の後姿を思った。今、降りた船の沖に去り行く姿を追っているのだろうか。傍らの鞄は「柴又の寅さん」の持っているような少し疲れたトランクであろうか。その少し丸い背中に達観した人生の重みを感じるのである。

そして、もう一つの視点。これが白いボストンバックを持った若者であったなら、沖を遥かに、紺碧の海に浮かぶ白帆に、大いなる夢を思い描いているのではないか、と。

否、大きな帽子に憂愁の顔を隠した女性であったならばと思いを巡らす。突堤にバック一つで海を見ている。あまりに小道具が揃い過ぎているではないか。でも夏の海はきらきらと輝いて生命感に溢れている。私の想い込みが過ぎたのだ。もし、作者自身がこの突堤にいたのなら、如何なることを……。

朝霞むかし歓呼の声の駅

石山かつ子

春の訪れとともに霞に包まれるという実景から生まれ、空気中の微細な水滴が浮遊して空がぼんやりすること。朝霞を見ていてふと幼き日の母に手を引かれ、日の丸の旗を持って出征の兵隊さんを見送りに行ったことを思い出した。当時は皆、国民服と国防婦人服であった。家族は出征兵士の為に武運長久、安泰を祈り、一片の布に赤い糸で一針ずつ縫ってもらい千人針を持たせた。

その頃の兵隊さんは村中のヒーローであった。万歳・万歳で送り出したあとの寂しさは幼な心に言葉にできないけれど感じた。

戦争はもうたくさん。人間が人間でなくなってしまう。体の中に心の傷は一生残って今も忘れることが出来ない。

ウクライナの街が壊れ、命が失われてゆく映像を見ていると心がつぶれそうになる。

祷りて癒ゆる病は何ぞ棕櫚の花

井口俊晴

「マネキン」の六句目に登場する作品。この句は十年前に刊行された「面」第一一四号の「山本鬼之介句集・マネキン」には収録されていない。何故だろう。

まず「祷る」という言葉。普通は「祈る」と書くところだろう。しかし、作者は神仏に跪き、真心をこめ、その命の長からんことを祷る。願うのは重い病気からの回復。それも「癒ゆる」で、ただ「治る」といった簡単なものではない。

病気に苦しむ人のために、神仏に祷ったら癒える病気はあるのか、あるのなら教えて欲しいと作者は詠んでいる。そこに南国的で明るい「棕櫚の花」が配され、悲観の闇に一筋の光が投じられる。

それでは、この句の世界は楽観的か、それとも悲観的か。私は楽観的であり、だからこそ十年経って、新しい句集で復活したのだと思う。宗教的な「祷りて癒ゆる」は、そうした作者の内面を表している。

宇田白鷺

楪の葉脈しかと先祖の地

この度は山本鬼之介主宰の「句集マネキン」を送付いただき有難うございました。私が多くの心引かれる句の中から「楪の」一句を選ばせて頂きました。小生、鳥羽谷句会に参加させて頂き、間もなく島津城子先生から「楪」の一句を初句として選んで頂き、感激いたしました。

鬼之介主宰の一句は若狭町上黒田で誕生された、父、嵯迷氏の面影を詠われたのではと思われました。

「楪」は新旧交代を象徴する、正月飾りの目出度い木と言われます。小生、小学生の頃、嵯迷氏は何度か我家にお泊りになりました。姉である「ゆう」が懐かしくあったのでしょう。背丈の大きい嵯迷氏には浴衣が短かく、長い足で胡坐をかいておられた姿が思い出されます。鬼之介主宰に取っても先祖の地。楪の葉脈が力強くますます大きな楪となって行くことでありましょう。

梅澤佐江

しくじりも受けて二月の江戸手妻

筆者もプロの手解きを受けマジックを齧っているが、江戸手妻には到底及ばない。手妻の語源は、手を稲妻のように素早く動かすことからで、日本で独自に発展した奇術であり、藤山新太郎氏が継承して来られた。和の所作、日本舞踊の要素を取り入れた伝統芸で、国の無形文化財にも指定されている。その歴史は古く、江戸時代には四代将軍家綱に披露された記録も残っている。

掲句、春とは言え一年のうちで最も寒い二月、出し物は「胡蝶の夢」、「蒸籠」、それとも「水芸」？　何れにしても乾燥期は手妻師泣かせである。しかし、彼らは常に百二〇％で臨み、手違いがあっても臨機応変に対応して受けすら狙えるのである。島田髷、裃の演者の色香も相俟って、今日も観客を幸せにして喝采を博したのであろう。日本特有の文化の「型」や「見立て」に見る胡蝶の舞の無常観、水芸の美しい世界観に、琴、三味線、尺八の音色が耳元迄聞こえて来るようである。

大橋廸代

長刀鉾の稚児と眼のあふ二階かな

千年の古都を代表する祇園祭は町衆による晴れの舞台。七月十七日午前九時を期して三二基の山鉾が四条烏丸から「エンヤラヤー」の掛声でゆっくりと動き出す。長刀鉾は「くじ取らず」で山鉾の中で唯一、生稚児を乗せ巡行の先頭に立つ。古代から幼い子供には神霊が降臨しやすいと考えられ神社の祭りに参加してきた。稚児は七月十三日以降は地面を歩くことを禁じられ移動も大人が抱っこして神様を下に置かないよう気をつける。

伝統の衣装を着てきれいにお化粧をした稚児は、緊張の面持ちで額に汗が光る。特別席の二階桟敷で胸の高鳴る贅沢な時を満喫、切れ長で涼やかな黒目勝ちの稚児と目を合わせた一瞬を見事に物された。

祇園会や眉毛の下も剃りまひよか

妾宅へ祇園囃子をはこぶ風

情緒たっぷりで艶冶な右の二句に挟まれた掲句は、泰然自若の風格で「コンチキチン」のお囃子と共に心に響く千載一遇の珠玉の一句。

大村節代

柴垣や鰻の「松」を声高く

食べ物屋は品書に、売りたい品を真中に上下を作るという。例えば松・竹・梅と三段階にする。客は松は高くて論外だ。しかし、本当は梅を頼みたいのだが、ちょっと気張って竹を頼む。それ故、三段階には意義がある。

作者は日頃は竹や梅を頼んでいるのかなと思う。ところが今日は、何やらめでたい事の祝なので、松にすると決めている。そして何時もの声音でさりげなく頼んだ。しかし「声高く」の措辞により、いささか声が大きく何やら良い事がある晴れがましい様子や、さらに得意気な様子が周りにも伝わり、近くの客もほのぼのと笑みを浮かべ見ている。

上五の柴垣とは、柴を編んで作った簡素な垣だが、数寄屋建築にも用いられるという。柴垣により、彼の鰻屋が風格のある何代も続いた老舗であると分かる。

柴垣と声高くで読手に伝わる。何とも省略の利いた人間の深層心理をついた句であろう。

小倉倭子

三鬼が叫ぶ紫黄よく来た忠治をやれ

言わずもがな、西東三鬼の叫びである。この潔い叫び声をそのまま一句に成り立たせてしまうなんて、凄いと言うか大胆と言うか誰にも出来ない俳人山本鬼之介独自の心技であろう。有季を取っ払い三鬼の快哉を叫ぶ単刀直入の魅力を表わした句となり一目でその場面が鮮明に画かれ共有の時を得られる句である。三鬼主宰の「断崖」時代の催しの折りの句なのかと想像する。当時、三鬼の徒弟であった紫黄が催しに遅れ慌てふためき飛び込んできた、三鬼は喜び思わず〝待ってました〟とばかり紫黄十八番の「国定忠治」を命じる。三度笠、旅合羽の紫黄忠治。イヨッ!!

「赤城の山も今夜を限り生れ故郷の国定村や縄張りを捨て国を捨て可愛い子分の手めえ達とも別れ別れになる道途（かどで）だ」。

この忠治の一句から、俳人山本鬼之介の意気たるものが伝わってくる。

五明　昇

人馬はるけき川中島の秋景色

「鞭声粛々夜河を過る　暁に見る千兵の大牙を擁するを　遺恨なり十年一剣を磨き　流星光底長蛇を逸す」（頼山陽）。

川中島の戦いは戦国時代に、領地拡大のため北信濃に侵攻した甲斐の武田信玄と、北信濃の豪族から助けを求められた越後の上杉謙信との間で、主に川中島の地で行われた戦いの総称である。戦国最強と謳われた両雄の戦いは十二年間、五回に及ぶが、中でも直接刃を交わした一五六一年（永禄四年）九月の第四次合戦は日本戦史に残る名場面だ。

謙信は「車懸り」の戦法で甲州軍を脅かし、「鶴翼の陣」を敷く信玄の本陣に単騎斬り込んだという。両雄決戦の地・八幡原には謙信が信玄に三度斬りつけ、信玄の軍配団扇に七つの傷が残った「三太刀七太刀之跡」の碑が立つ。

掲句からは秋色濃き古戦場に立ち、往時を偲ぶ作者の感慨がしみじみと伝わってくる。秋は、両軍合わせて八千もの将兵の血を吸った八幡原に、鎮魂の川霧が立つ季節でもある。

万屋の奥の奥から竹夫人

境　延昭

八章からなる句集「マネキン」の章のタイトルの句。平成二十六年七月、作者が主宰する句会「俳句の手ほどき」での「万」詠込みの句である。

抱籠や添寝籠とも呼ばれた季語「竹夫人」を初めて知った。実物を見た気憶はない。互選で私の他女性二名が採ったのが気憶に残る。中七の措辞と相まってダッチワイフへの連想があり、艶めくと云うより際どいものを感じた。万屋のアイテムであったかはともかく、その意外性が句の肝である。

写生ではない、詠込みの漢字一字に着想を得ての作句が実に巧みである。景の虚実を問えば虚、具象的な表現により実景の様に読ませてしまう。作句のプロセスとして、季語は起点ではなく着地点でしかない。

青蔦の窓辺に憩ふトー・シューズ

椎野美代子

嘗て正方型の大きな木造家屋が青蔦に覆い尽されて居るのを眼にした。つるの触手を伸ばし延い続ける生命力の強さに、我身が丸ごと絡め盗られたかと怖気付いた覚えがある。きっと今日まで木の家に住んで居るからであろう、私的な思いかも知れないが。この様な蔦の生態に相応しく違和感の無いのは洋館がよい。掲句からは、まず青々と繁る蔦に覆われた瀟洒な洋館の窓がクローズアップされる。青蔦に縁どられた窓が見せているはトー・シューズ、即ち踊り子だ。レースを飾るふわふわ白いチュチュを身につけて。レッスンに疲れたのか、未だ幼さの残る物憂い横顔、無造作に投げ出されたトー・シューズの脚。さながらドガの名画「踊り子」を彷彿させるばかり。取り合せのよろしさは色彩を生み、その映像を立ち上げる力を内包する。平明な写生の描出する詩情の魅力。

秋まつり親父ゆづりの博多帯

島津初花

日本全国いたる処昔から伝わっている祭が沢山ある。豊作を祈願する「春祭」収穫に感謝する「秋祭」。それらは幼少から老人になるまで祭には人それぞれの思い出が詰っているのです。祭の日が近づき、太鼓や笛の練習が始まるとおのずと気分が浮き立つのは、皆んな祭が好きなのである。

秋祭りの日が来ると必ず思い出される父のこと。父の形見の着物や帯は、今は作者の代へと引き継がれている。しかもその帯は特別な博多帯と強調しているのがこの句の心髄ではなかろうか。秋祭が巡ったその年は当り役で着流しに博多帯を締めた作者の立ち姿が浮んでくる。

父との思い出は、祭の日の博多帯に繋がっているところが心に響いた一句となった。

鳥羽和風

新妻や冬至南瓜に箸の穴

日本は古来　冬至の日に南瓜を食べる風習があり今も全国に残っている。我々が子供の頃の南瓜は、石の様に堅く表面は赤みを帯びてごつごつしており、冬至の為に納屋の隅に保存してある物で、母はそれを鉈で割ってから庖丁を入れる程、堅かった様な記憶がある。南瓜の実もぼそぼそとしていて砕けやすく、現在のような粘りっけのある物ではなかった様だ。冬至に南瓜を食べる風習は、野菜の乏しい冬の時季の祭りの供え物の意味があると記されており、栄養価値も高く冬の食物としては欠かせない物であったのであろう。

新妻が初めて作る冬至南瓜、母から教わっているとは言え家族皆んながおいしいと言って貰える味でなければ家の嫁として失格かも、軟らかくしかも味良くが「箸の穴」に表現されています。嫁として合格。後は柚子湯が待っている。ぷかぷかと浮く柚子風呂、温かな湯船に首まで浸り、この一年の労を癒す。

ああ　日本は何と優雅な国であろう。

永野史代

十三の琴柱の影も夏座敷

十三弦の琴を支える琴柱。弾く曲によって琴柱の位置を変えたりもする。生田流は琴爪の先が四角、山田流は人の爪のように細長い。琴柱の影とは何だろう。張った琴糸、琴柱の山に微かな影が生じその山波の影か？とても繊細な所に目を向けたこの一句。もっと複雑な意味があるのだろうか。琴柱は象牙や木のものもあり、それぞれ影と光が多少違ってくるのかも。ヴァイオリン、チェロなどは魂柱（こんちゅう）があると聞いた。季語の夏座敷が奥深い。その昔、水明誌に確か波多野寿子氏が素足で琴を弾いたと云う話が載っていた。（寿子氏でなかったらごめんなさい）。夏座敷、あるいは冬座敷、素足で弾く琴は足指の先まで集中している様（さま）が聴く人に伝わってきて心を打たれる。昔は飛鷺子さん、今は鬼之介さんと主宰を気やすく呼ぶ私。句集「マネキン」のご上梓おめでとうございます！句集には昭和の面影、嵯迷師に似た所、意外と古い女性の題材にも溢れ、とても愉しい一冊である。

檜鼻ことは

鉄線を咲かせ勝気を解くをんな

鉄線は好きな花。初夏になると、紫や白の美しい花を咲かせる。鉄線の名の由来は、蔓が細く針金のようだから。茎は強く、折れているように見えても、芯は折れていないので、その部分で枯れることはない。

さて、勝気な女性。仕事やプライベートでほとんど弱音を吐く事がない。裏表が無くサバサバしていて人の好き嫌いがはっきりしている。きちんと自分の頭で物事を考えて話すので曖昧なことを言わない。ようするに隙がない。こういう生き方は、ある意味あこがれる生き方なのだけれど、どこかで息を抜くことも必要かなぁとは思う。

掲句の女性も鉄線が好きで育てているのだろうか。鉄線の花を見て、肩の力を抜き、素に戻るひととき。そのような姿を他人に見せることはほとんどないのだろうが、ゆるやかな姿、もうひとつの魅力ある姿を垣間見た思い。

花冷の園遊会のご質問

日高道を

毎年春と秋の二回、赤坂御苑で天皇皇后両陛下を始めとする皇族方が、その年の功労者や各界の代表者と親しく懇談される園遊会。

中でも天皇陛下の「ご質問」はその年に最も注目を浴びた人物や活躍したスポーツ選手に対して向けられ、その様子はテレビでも広く報道される。

その年の園遊会は生憎の花冷えの天気、参列者は整列して皇族方のお出ましをお待ちしていると、そこに天皇陛下を先頭に各皇族がお出ましになり「ご質問」が始まる。

少しぎこちなさげな「ご質問」、それに対して緊張しながら答える参列者。

天皇陛下（この句の時は平成天皇）の生のお言葉はどんなものなのだろう？

注目のその人は何と答えたのだろう？

普段身近に接することの出来ない天皇陛下の日常会話を知ることの出来る一瞬を座五の「ご質問」に見事に凝縮された一句である。

蔵町の卯建に惚れて来る燕

保坂翔太

掲句は、「蔵町の卯建」と詠っていますので蔵造りの町と称される川越のことではないかと思いました。川越で蔵造りの店舗が生まれるのは、明治二十六年（一八九三年）の大火を契機にしてのことだそうです。

卯建は、室町期の京の町家等では、防火壁の役目より、隣家との境界の役目が主だったようです。しかし、江戸時代になって大火が頻繁に発生すると、防火壁として発達しますが、のちに装飾的な役割に変わって、商家の富や権勢の象徴となりました。「うだつが上がらない」とは、富裕でなければ卯建を上げられなかったことから転じたともいわれています。このことは、卯建のある川越の蔵造りの町並からも想像できます。

その蔵町の卯建に惚れて燕が来る、というのです。作者は、蔵町の卯建が余ほど気に入っているに違いありません。燕は、一度作った巣を覚えているとのことですので、これぞと思った卯建を目標に、次の年も飛来し、同じ巣で子育てに勤しむのではないかと思うと、なおさら燕への愛おしさを覚えます。

墨壺の棟梁遥か竹の春

曲淵徹雄

墨壺は、大工が材木に直線を引いたりするために使われる道具である。古いものは正倉院にも残っていると言われる。

掲句は、作者が「水明俳句会」の第五代主宰を継承する前、平成三十年秋の作。作者の少年時代、昭和初期の建築現場では、木製の手造りの墨壺が使われていたと思われる。墨壺の糸をピンと弾いて、木の香も新しい材木に墨を入れ、職人を差配する棟梁の凛とした姿が浮かんでくる。

作者に少し遅れて育った筆者は、小学校卒業の折の記念文集の中で、将来なりたい職業の項に「大工」と書いたことを思い出す。

今は木造の一軒家を新築する現場で棟梁が腕を振るう姿を見る機会は少なくなっている。句には、望郷・懐古の思いと、手仕事を尊ぶ気持ち、そして「水明」をこれから背負わんとする気概が込められているように思う

「針千本」の小指はかなき薄暑の夜

星野和葉

「指きりげんまん、うそついたら針千本のます、指きった」と言ってからませていた小指と小指を力を入れて離す。さあこれで約束は破れない。たわいない事だろうが、とにかく約束したのだ。子供心に満足げである。

作者は、何かにふっと思い出したのだろう。「小指はかなき」とあるのは、その昔、指をからませたお相手との別れがあったのではなかろうか。今、もやもやと思い出に更けっている。あの時もこんな夜だったと。

こんな可愛い仕種も、古くは古代に始まり契約の際、指や手の一定の動作をもってその印とした事例がある。又、遊女が相愛の男性に対して契約のあかしに指を切るという恐い話もある。

指切り、げんまんは拳骨一万回、針千本飲ます。こんな恐しい事が、いつから子供らの遊びの仕種、歌になったのだろうか。

緋目高を枯淡の甕が迎へたり

町野広子

掲句を拝読し先ず大きな愛を感じた。目高を飼うと決める以前から用意のあった気に入りの甕。いよいよ目高の来る日―飼い方を教わる楽しい時間―そしていそいそ家路に向かう。筆者はこの一句の中に三人の人物を思い浮かべる。一人目は目高の飼い主、二人目は譲ってくれる相手、三人目は顔も名も知らない甕の製作者。作者は無類の生き物好きであろうと想像する。身辺には絶えず生き物が居て、多忙な日々をふと癒やしてくれる。又、甕の風情が良い。派手でなく、濃淡で描かれた素朴な骨董品なのである「枯淡の甕」が掲句を、より格式ある一句へと導いていると思われる。更に「迎へたり」で目高への愛情が深く伝わり、小さな小さな生き物を、朝に夕に愛しく眺める作者が見えて来る。それは何者にも代えられぬ大切な時間なのであろう。

因みに筆者宅でも、我が家生まれの二十センチを越す金魚二匹と目高が居る。

春菊がブランド牛を連れてくる

正木萬蝶

冬の季語である鋤焼は牛肉が主役で色々な食材の集合である。この句の春菊は春の季語。渋い緑色に癖が表れている。好き嫌いのはっきりする野菜の一つであろう。これは明らかに鋤焼を詠んでいるが主客転倒している。ブランドと云うからには神戸、飛騨、松阪などだろうか。そして勿論A5ランクか。垂涎の一句である。記憶では二、三度口にした事がある。名立たる肉を連れてくる春菊にパワーを感じる。苦味、香り、色。一癖ある存在だ。春菊あってこその肉の旨味でほかの鋤焼の食材では物足りない。格調高い句の中にぽっと放り出されて面白味が増しているように感じる。

最近は脇役が主役を食う映画やドラマが多くバイプレーヤーが評価されている。

店先にも人にも脇に渋い逸材が有るのやも。若松例会での記憶が新しいお茶目な一面を覗かせる句である。

男衆（おとこし）の締むる春着の帯の音

丸山マスミ

このお句の舞台は、花街京都祇園の置屋さんの衣裳部屋でしょうか。薄いピンクの着物に薄い黄緑色などの帯を締める快い音が聞こえてきます。いかにも春らしい華やぎです。

この句の主人公は男衆。花街の奥に出入りを許され、芸舞妓の身の回りの世話一切を任されている唯一の男の仕事人。ここでは舞妓のお引きずりの衣裳の着付けでしょうか。その人の体形に合わせて、美しいラインが出るよう着付けをし、舞を舞っても着崩れせず、舞妓が苦しくないように、長さ約七メートル重さ約五キロの帯を締める。着付けは夕方お座敷が始まる前。熟練者は独り十分程度で仕上げ、次のお茶屋さんへと祇園の路地裏を自転車で駆けつける。仕事は着付けだけではない。挨拶廻りにも付き添う。男衆は祇園にはなくてはならない黒子なのだ。

しばし、艶やかな情緒に浸らせて頂きました。

燕にも五代の家格蔵の町

茂木和子

家督を何代も継ぐと云う事は、並大抵の事ではない。特に戦後は日本全体が、アメリカナイズされ全てが大きく変化した。特に家族制度の変改については、今では当り前になっているが、当時は理解が出来なかった様だ。掲句に出合った時、久し振りに当時が思い出された。

上五の「燕にも」の「にも」の助詞の捉え方、解釈は「……さえ」「……でも」であろう。

燕は習性として毎年同一の巣に戻ると謂れている。壊れた巣を繕いながらも自分の家を守る姿がいじらしい。又燕を迫害すると災いに遭い、営巣すると吉事があると云う。「五代の家格」との取り合わせにより家格の風格や趣が加わりより一層深い蔵町の姿が見えて来る。重量感のある素晴しい一句と思う。

「五代の家格」の中には、水明の歴史の中の五代目主宰としての重責と覚悟、そして次代につなぐ決意の一句として鑑賞させて頂いた。

小太りの鰹を主座に魚の棚

森本早苗

明石鯛が主座を譲ったに違いない。流石魚の王様の余裕と貫禄である。

昼網で揚ったばかりの明石物が、所狭しと並ぶ中、一番元気なメイタガレイがピチピチ跳ねている。浮かれた明石蛸が、忙しそうに這い回っている。そんな光景が目に浮かぶ。

魚の棚は市民の台所で、美味しい匂いと、活気の溢れた所である。

東経一三五度の子午線の町明石には、城と共に、四〇〇年の歴史を持つ魚の棚商店街がある。全長約三五〇メートルのアーケードを持ち、天井には大漁旗が犇めいている。

特産品の海の幸や練り製品、海産物の干物名物の明石焼（玉子焼）屋など、約一〇〇の店舗が並んでいる。

小太りの鰹を主座に魚の棚

今日は土佐からの珍客初鰹がでんと主座を飾っている。丸々として見た目も美しい。

山中みどり

花吹雪ビッグシップの船出かな

絢爛たる景が広がり、未来へと続く船出との措辞が魅力的である。水明第二例会が開かれている「本所地域プラザ、ビッグシップ」は帆船をイメージした五階建ての区立コミュニティセンターである。私は、この館の素案から立ち上げ、九年前の完成以来館長を務めている。私にとって、館は我が子のような我が家のようなものである。令和二年度の春の吟行会がこの館で開催された際のこの句は、主宰からの素晴らしい贈り物であった。主宰が書かれた短冊を目にするたび胸が華やぐ。

風光る水くろがねの厩橋

隅田川の水の色はまさにくろがね色。高い粘性を持つ水銀のように。都会の喧騒を飲み込み、黙して滔々と流れる。厩橋の東詰にはライオンの本社ビルが聳え立つ。主宰はお若い頃、お仕事でこのライオン本社をしばしば訪れたと聞く。厩橋を渡りながら、くろがね色の川面を見下ろして、どのような思いを抱かれたのであろうか。

由良ゆら女

年頃のかな女の写真秋の昼

桃割れか丸髷か大勢の男性の中に只一人かな女先生の写っているもの、女性句会の中心に座っておられるものなど何枚かを私も思い泛かべることが出来る。そんな写真をしみじみ眺めておられる主宰、この句は今年の「俳句日めくりカレンダー」の八月十九日『俳句の日』に宇多喜代子先生の解説付きで掲載されている。宇多先生の記をそのまま転記させていただく。

「秋の昼はからりとして爽やかです。「かな女」とは明治・大正の女性俳人の黎明期に活躍した長谷川かな女のこと。年頃と言えば明治四十年でかな女二十歳。代表句に〈生涯の影ある秋の天地かな〉があります。」

俳句の日という大切な日に敢えてかな女師を丁寧に解説して下さった宇多先生のお心を有難く思うと共に、思いを込めた写真一枚と季語の明解な作りの主宰句故に生れたもの、多言せぬ句の良さを改めて教えられた。

山本鬼之介

御礼のことば

俳句を始めて半世紀の節目の年に上梓しました句集『マネキン』に、俳壇の著名な方々より激励のお言葉や身に余る鑑賞文を賜り、そして、吾が結社の俊英の皆さんに一句鑑賞をしていただきましたことは、私の晩年の人生に色鮮やかな大輪の花が咲いた思いであります。句集と共に、この特集を吾が伴侶として参ります。まことに有難うございました。皆々様のご厚志に感謝御礼申し上げます。

さて、常任運営幹事皆さんの発案によってこの特集が組まれ、編集長の采配で二十八名の書き手が選ばれたと聞きました。皆さんお忙しい中をお時間とお手間を取らせてしまい申し訳なく思っておりますが、この二十八名という数字が、ある団体の人数と一致していることに気付き嬉しくなりました。

昭和を代表する浪曲名人―二代目廣澤虎造の名演目「清水次郎長伝」の清水一家・二十八人衆と同じ数なのです。はてさて、次郎長は?、大政・小政・石松・お蝶は?……、何方なのでしょう。

句集喝采

近藤徹平

◆秦夕美「金の輪」

ふらんす堂

著者略歴　昭和十三年生。同人誌「豈」所属、個人誌「GA」発行。『仮面』等十七句集既刊、他に句歌集、句文集等多数既刊。

金の輪をくゞる棺や星涼し

標題句、金の輪は小川未明の代表作の童話、病気の少年太郎が金の輪を転がす少年に出遭い、その夜少年から金の輪を渡される夢を見る、翌日から太郎は熱を出し死ぬという粗筋、結末が死の童話とは異常だが、愛児を失った未明をしのぶ句。

俳句の著作が多い著者だが、あとがきに子供が一人だから出来たこと、息子に様々なデザインの服を作って着せたが着せ替え人形じゃないと言われたこと、私の長女は俳句と記す。

夢の字は艸や夏嵐

その声はたしかに異界黄水仙

不死鳥の頁に付箋大夕焼

草薙剣のうはさ蝸牛

十字軍の影いとながし夏の蝶

さみしいといへぬさみしさ花柘榴

第一句、草に縁のない夢の字が何故艸なのか、漢字学者は学説を競うが俳句では夏嵐を感じるのだ。第二句の異界、第三句の不死鳥、第四句の草薙剣、第五句の十字軍と非現実を巧みに詠む句。第六句、著者の本音は「さみしいといはぬさみしさ」ではないか。著者の長女である俳句は当分健在。

◆竹村良三「竹村良三集」

俳人協会

著者略歴　昭和三年京都市生。平成五年「天塚」入会、木田千女に師事。同八年「狩」入会、鷹羽狩行に師事。同十四年「狩」同人。同二十四年「狩」退会。句集『まほろば』等三句集既刊。

本句集は著者の既刊三句集から自選した三百句に自註を加筆した。あとがきに、江戸時代の儒学者佐藤一斎『三学戒』に「老いて学べば、即ち死して朽ちず」とあるが、句集編纂の作業は九十三歳で「老いて学ぶ」であったと回顧する。

測量のポールに蹤きて秋あかね

病む妻にはじめての嘘冬銀河

初夢に生きて戻りし妻の声

「父の日は何も送るな」「そうするよ」

わが代で家系断絶袋蜘蛛

第一句、第二の人生は設計会社に入ると若い人と一緒に現場を体験し、第一の人生の経歴を白紙にして取組む心構えの潔さに敬意。第二句、病む妻への愛情。第三句、先立たれた妻への慕情。第四句、嫁いだ一人娘へ父親の武骨な愛情。第五句、会社人間として家系に未練はないと覚悟している。

鶴の子のまだ紅を頂かず

散りどきを花に教へて三井の鐘

第一句、丹頂鶴は生後一年で頭の羽毛が抜け紅に。第二句、人も生き物も自然の摂理に従う運命。余生も朽ちぬ俳句を。

山本鬼之介　選

水明集

雲梯を渡る手に豆風光る
大空へ餅の撒かるる春祭
街並の風情を保つ春の雪
ファッション誌ちよつと真似して春の服
取り出せば寝癖つきたる雛の髪

熊谷　越田栄子

浅草のはだか踊を荷風の忌
鳥雲に一茶の越えし浅間山
北を向く啄木の墓雁帰る
切腹は武士の心得初桜
お河童のはないちもんめ木の芽垣

さいたま　染谷正信

木漏れ日を楽しむ吾に山笑ふ
風はらみ夢のふくらむ春コート
個性あるにはとり十羽春の庭
薔薇の芽を数ふる朝のうれしさよ
わだかまり空に飛ばして山笑ふ

さいたま　山岸久美子

早春の漆黒の畝均しけり
啓蟄や庭師ら松の菰を焼き
啓蟄のひかり啄む庭雀
父となる窓を開ければ初桜
花冷や人出少なき陶器市

上尾　横山君夫

山笑ふ里も神楽の笑ひかな
山笑ふ秩父に遊ぶ汽車ぽつぽ
雛の市手に綿菓子の子もゐたり
時刻表ひろげ撮り鉄春休
薄幸の少女の涙蜃気楼

さいたま　渋谷きいち

水攻めの戦史の碑文雁帰る
校庭の朝礼の空雁帰る
雁帰る千の石段見上ぐれば
三椏の花に瀬音のかすかなり
一つづつ遊具を包む朧かな

橋本京子

雪解水集めてダムの力増す
忍び逢ふ二人をつつむ庭朧
蒼天や甲斐路満目桃の花
春の雷子鬼の遊ぶ雲の上
白酒を朱唇にそそぐ細き指

さいたま　反町　修

春の朝夢占ひの本開く
春愁や昭和演歌に癒さるる
つぎつぎに春を繰り出すバスの窓
大空の点となりゆく帰雁かな
幹に初花咲かせ古木の底力

平塚　丸屋詠子

春分の雨やはらかき夕べかな
パレットの緑あふるる山葵棚
どこまでも透きとほるみづ山葵沢
球磨川の流れせはしき雪解かな
杳として春の一日定まらず

さいたま　元田亮一

春灯や馴染みの店のハイボール
白魚や日の本一の斬られ役
空つぽの学生鞄春の風
ひな飾るしばし仏間をお借りして
春浅し学生街の一人飯

若狭　檜鼻ことは

花冷えの外階段のハイヒール
城壁に先人の影花筏
村営の湯宿に迫る春の山
金婚日銘銘に盛る桜鯛
傷の猫雄雄しく帰る遅日かな

さいたま　梅澤輝翠

三月や子の試歩日毎延びてをり
父祖の墓ふところに抱き山笑ふ
ひとごゑと風の膨らむ春の山
水温み犇き合ふや鯉の口
花時の雨に君待つ喫茶店

笹本啓子

団子焼く茶屋の煙や春の山
人憩ふ見晴らし峠春の山
朝ぼらけ畑に雲雀の声いまだ
三つ目は鮭のにぎりや山笑ふ
賑やかにハイカーの声山笑ふ

西幅公子

揚げ雲雀悲しきことも全て幸
傘寿の日赤バンダナに山笑ふ
誘ふ目の視線あまたや雛の市
転校す友と野宿や春休
黒北風や今際の兄の細き脛

新　暦文

旧友と再会したる駅おぼろ
夕雲に一群まぎれ雁帰る
雁帰る城跡からの古戦場
大利根に影を落として雁帰る
桜まじ見上ぐる門は増上寺

さいたま　村杉清吉

冬木の芽胎児が腹を蹴るごとし
日脚伸ぶ山が落暉を持ち上ぐる
サラブレッドの円らな瞳春を待つ
雪虫や納屋の農具の錆を取る
流し雛遠つ祖より継ぐ娘

保坂翔太

耳鳴りに耳すます建国記念の日
建国日床屋の椅子で聴くラジオ
丈のほど春菊採るか採らざるか
田楽を商ふ訛り祖谷の峡
啓蟄やスケボーに乗り青空へ

曲淵徹雄

指揮棒のひと振りを待つ木の芽かな
ディオールの美しすぎる春の服
本堂にあまびえ達磨春彼岸
切れ長の白衣観音二分の花
春まつり奉納相撲豆力士

高崎　原田秀子

久久の春野に立てば鶸色に
冬の庭親子の石虎川渡る
紅梅の一枝を求め湯島坂
円陣の少年達や下萌ゆる
四半分下萌ゆる小さき庭

さいたま　新井孝麿

初桜稚児行列の挿頭揺る
山の辺の古墳ひつそり初桜
山吹の影置く水路春の雨
明暗の虚無僧と合ふ春の夢
人生の長き助走路末の春

春日部　仲田利子

威勢よき宅配春泥零しゆく
「一片食分」と添へ書き蕗の薹
ワクチンの接種会場梅匂ふ
静けさの中なる里の初音かな
野の風に初蝶息をととのへる

さいたま　加藤でん治

春服の軽ろき手ざはり気も軽ろし
芽立ちにも遅早のありて寺の庭
ややぬるき露天風呂なり山笑ふ
ダム湖からの戻り道よし山笑ふ
お神楽の種まくかたち春祭

東京　鈴木和子

静やかに雅楽協和の春の宴
氷川の杜花しづめ舞ふ童女たち
故郷は胸裡に褪せず仏生会
薔薇の芽や紅顔の子の反抗期
鐘供養五臓六腑に響きけり

さいたま　清水桂子

湯治場の足湯姦し山笑ふ
失ふも得るも晩年山笑ふ
顔似たる雛の市に歩を止む
永久に名を残せし句碑や風光る
野遊びや生えそろひたる永久歯

篠﨑紀子

春休みジャングルジムに付きし泥
悠久の氷河に落つる春の星
走り根に躓く朝や初てふてふ
蜆汁ままごと程の米を研ぐ
もうひとつ白寿の叔母や桜餅

池田珪子

横顔の美しき観音黄水仙
諭すかに春の雪降る荒鋤田
ひよこらも押し競饅頭春寒し
病棟をつなぐ廊下の余寒かな
建売の旗がはためき二月尽

本橋稀香

春の山おもひおもひに薄化粧
暮れ泥む空の群青夕雲雀
揚雲雀心乱さずジャムを煮る
柔らかな光編み込み春セーター
姿見に決めポーズする春の服

さいたま　菅原真理

他人なら買はぬけんかの蜆汁
見上ぐるや三三五五に初桜
啓蟄や伸びをしてゐる四畳半
薔薇の芽や子犬に浅き刺され傷
大江戸の空を仰げと雛流す

伊奈　菅原卓郎

ぶらんこの白き鉄鎖の傷の跡
春塵を吸ひこみゴールまで走る
春草に赤き補助輪来て止まる
残雪の踏まれながらも白残す
誓子忌や見えぬ中にも情はあり

さいたま　吉川拓真

少年の魚籠に走れり桜魚
公魚と思はば木つ葉らちもなし
かたくりの咲くや札所に杖置場
かたくりの花君を見染めし十五の春
木の芽風肩でかぢ切る一輪車

森美枝子

風光る花壇に笑まふ陶の侏儒
祇王寺の庵主いとしや白椿
巣ごもりの厨窓開け紅椿
背からの風のそよぎよ糸柳
睦み合ふ鳥のベールに糸柳

さいたま　斎藤みよ

風戯へするせせらぎや茨の芽
揺れ動く紙漉き槽の水温む
水温み浮子が沈むや竿の先
春の山景色が廻るループ橋
春めくや待ち人土産ぶら下げて

野村美子

風やさし雛の舟行く池の端
年経れど老いを知らずや春の服
芽柳に想ふはショパン協奏曲
薔薇の芽のささやくやうな今朝の庭
薔薇の芽や花の色知る老婦人

越谷　阿部幸代

平癒願ふ社の隅の初桜
天空へ依り代となる白木蓮
本殿の鴟尾をたゆたふ春の雲
宿坊の上り框に遍路笠
啓蟄は暦の上と亀出でず

春日部　諏訪サヨ子

それほどにめんこい人よ菫草
祝ぎの日の蛤椀とちらし寿司
観梅や一万歩まであと少し
見はるかす五つの湖の朧かな
一斉に飛び立つ雀春景色

若狭　山﨑郁子

春の雨ゆつくりとくる蟠り
薔薇の芽や華やげる日を待ちわぶる
我先に手桶持つ孫彼岸かな
天守より桜見下ろす姫心地
辛夷咲く無人の駅に一人降り

さいたま　岡田宣子

京盆地囲む五山や春の山
富士塚よりも低く秩父の春の嶺
登り来る足音軽し春の山
水温むビルの谷間をクルーズ船
春休み再会を待ち二年過ぐ

竹澤和子

溜池の山影淡し水温む
気分屋の剪定鋏枝散れり
飛花落花生き直さうか今一度
疎まれて落つる椿よ音もなく
淡海の海春枕辺に繋り舟

伊予　向井章子

山笑ふ海また笑ふ峰の色
国後の望郷の墓流氷来
恋人はゐるのか海胆の針百本
プーチンの頭を冷やせ流氷来
山笑ふ卒塔婆起こして帰りけり

小浜　松島寛久

松風や湖面を揺らし雁帰る
夕暮や山頂赤く雁帰る
雁帰る父は帰らず向かう岸
朧月にぶい光の散歩道
遠浅の海に夕陽や旅の春

さいたま　千坂平通

川べりの野焼の臭車内まで
鉄橋の下に広がる野焼煙
土手向かふ雲と一体の野焼煙
夕陽射す花穂の光猫柳
川べりに枝のオブジェや猫柳

武田重子

八ツ橋の鯉が水先雛送り
節分会八十個の豆食べ切れず
補陀落へ共に行きたし捨雛
薔薇の芽にそつと呟く人ありき
草叢を突き進みゆく茨の芽

飯田忠男

頬に風妹と語らひ土筆摘む
袴付けつんつん気取るつくしんぼ
土筆むく黒き指先見せ合ひて
山笑ふ笑ふ羅漢と泣く羅漢
尼寺の番犬「オサム」山笑ふ

さいたま　森　和子

切通し抜け早春の鎌倉へ
絵蝋燭の炎のゆらぎ春浅し
早春や墨跡太く掠れをり
強東風や砂絵まるごと攫ひゆく
たつぷりの陽の香有明海苔干さる

川崎　鈴木玲子

春服や紙ひかうきよ風に乗れ
学舎の裏山芽吹きそはそはと
彩りはそれぞれの揺れ春コート
オープンカー木の芽晴なりいろは坂
ゆるり旅秘めし想ひに似し木の芽

さいたま　緒方みき子

下萌や流行色のシャツを買ふ
雛の間を密かに覗く夜半かな
見当らぬ五人囃の太鼓かな
思ひ出のひとつ加へて雛納め
イヤリング揺れて波音さくら貝

綿貫ひさの

沈丁花月細くして匂ふかな
啓蟄や錆びしバケツに残り水
啓蟄や君祝福の調べあり
春告鳥留まる梢のしなひけり
オルゴールの陽気な音色春愁ひ

さいたま　小林京子

花冷や三密避けて家籠り
冴返る演歌流してゐる屋台
春キャベツキュキュと料理のはじまりぬ
葱坊主猫のちよつかい受けて立つ
花菜風肌にやさしく問ひかけぬ

杉戸　佐々木史女

野を焼くや山並み遠く煙の中
巣立つ子や橋のたもとの猫柳
水月を鴨の親子が切り裂けり
三月の泥の付いたる青野菜
牡丹の芽膝の赤子が伸びをする

さいたま　湯浅　和

学帽に新たな徽章風光る
咲きてよりなほ世につくす椿かな
針の冴へ皆んな可愛く吊し雛
外は春吾は手摺の散歩道
絵手紙に似合ふ椿の花数多

川村　治

仕舞はれて猫の戸惑ふ春炬燵
啓蟄やシュレッダーの唸る音
轍無き馬車道跡や陽炎へる
陽炎ふや昭和モダンのカフェの路地
蒲公英や託す未来は風任せ

草加　外村紀子

春の磯つり名人の釣果かな
山桜見に期待ふくらむ旅の宿
水温む川さかのぼり奥秩父
料理を並べ客待つ座敷彼岸かな
低けれど眺望自慢山笑ふ

さいたま　森下美智枝

ひとり居の夕餉の菜飯青き味
亀鳴くや退職の夜の帰り道
畦行けば風の追ひ越す彼岸かな
愛されし記憶のありて春の虹
髪梳きて首のほくろや春愁

霜多光代

合格の報せ受くるや梅うふふ
春の宵泣きたくなる時深呼吸
落椿紅く地を染め死に急ぎ
雫して神宿るなり春の月
胸中に燃えひろがりし野火の色

小山敦子

目印のはげ山もまた春の山
裏山の居所定まらぬ雲雀笛
虹鱒の塩焼きがぶり春の山
水温み水車が廻り鯉が跳ぬ
お彼岸や故人を偲ぶご招待

さいたま　小川洋子

背伸びして春の寒さに立ち向かふ
建国日こくりこくりに妻の声
肘枕覚めて消えゆく春の夢
色と香を水面にのせて梅一枝
抜け道に残る夕陽や枝垂梅

水野興二

晴々と渚を歩く春コート
歩道橋春のコートのリズミカル
高台からの大パノラマや山笑ふ
陸奥や雲一つ無く山笑ふ
今日佳日花見山へと山笑ふ

遠西勢津子

我が老いを覚ゆる日にぞ山笑ふ
亡き父の音なき夢や春コート
戻り道陽はまんまるに春の色
春コート足どりはづむ三拍子
春一番去りゆく人を呼び戻す

川口　新井のり子

高きよりたれ幕そよぎ雛の市
遠き日の雛市の雛色褪せて
ディズニーのパレード久久春寒し
ディスタンス守るパレード山笑ふ
雛仕舞ひ幸ありがたきひと日かな

さいたま　鳴海順子

父と子の厨に立つや女正月
女三人巣鴨へ向かふ女正月
お社の主殿（とのも）の歯朶のみづみづし
持ち寄りの漬物自慢や女正月
地図拡げ旅をするなり寝正月

後記朝香

春の雨亀は万年槽で生く
難問のパズル解きけり春の夜
貝寄せに帽子いづこへ飛びゆかむ
ビル火災目前に見る春の午後
戦禍深く傷つく少女春寒し

和歌山　南條きわゑ

来ぬ人を待つのも楽し春炬燵
春の雨ひさしへついと緋の蛇の目
相傘は恋のはじまり春の雨
耳元でしやんしやらりんと春ピアス
待つのは苦手啼いてみせてよ鶯よ

吉川　杉浦理恵

赤と黒寄り添ふ二匹春の鯉
外つ国の争ひの地に東風よ吹け
ビル解体青く広がる春の空
摘草やぎゆつとにぎりし小さき手
下萌や野球応援大声で

東　京　畑宮栄子

山峡の瀬音高むる春の雨
キッチンに犬の遠吠え晩霞
舟べりの飯蛸襲ふ猫パンチ
春霞牧場の朝の牛の声
三月や似顔絵描きが店開く

さいたま　鈴木藻好

地図広げ桜の便り待つひと日
主婦の腕競ひ合ひたるいかなご煮
おとがひの細き女雛は祖母の作
ふつくらと稚抱くやうな春キャベツ
一病が相棒となり春迎ふ

和歌山　嶋田洋子

忘れ物春一番のバス停に
遊子歩む春一番に誘はれて
庭の隅春一番の置き土産
雛納小箱がひとつ残りをり
緋毛氈干して漸く雛納

さいたま　北出久美子

雨後の日に光る欄干風光る
薄明かり梅の香沁みる夜勤明け
曇天に蕾の温もり彼岸かな
大粒の結露の向かう彼岸寒
父と行く山の辺の道風光る

さいたま　鈴木敦子

余寒なほ真夜中に見る温度計
雛飾る母の横顔優しかりけり
内裏雛飽かず見つめていたりけり
停年の知人遍路の旅に出る
分数の計算苦手卒業す

高原和子

和箪笥に母子手帳あり彼岸入
夕桜ほのかに余光含みをり
樹の下に何埋もるる桜かな
花冷えや太宰最期の水浅し
角帽は桜の海を今日船出

横山礼子

草青む休耕田の五六枚
田向かうに桜色づく旧街道
早々と逃ぐる三月追ふコロナ
シャボン玉曽孫の動画スマホより
春の闇もと居し家の灯を遠く

横　浜　山岸弘子

身仕度を早めて接種木の芽晴
エレベータ開けば春の服並ぶ
二回目のリモート会議春の服
嫁に買ふマタニティは春の服
辿り着く分水嶺に木の芽風

東京　飯室夏江

背広着てブランコ揺らす昼下り
行きずりの三椏の花笑み誘ひ
日の落ちて菜の花の道ほの白く
大広間に据ゑる花菜の明かりかな
幼な子やブランコ漕いで数いくつ

柳父はる

春時雨遠く見送る滑走路
遠ざかる長距離走者なごり雪
波走る小暗き岩間海苔紅し
海苔髪のごと波にまかせて浮き流る
波光り日焼けせし手の海苔を干す

東京　山中いちい

コロナ禍に孫の誕生やよひかな
子供部屋七段飾り雛が占め
マーケットのバケツに桃の花笑みて
遠目にも紫そまるやほとけのざ
水ぬるみ小魚の群うかびくる

鬼石　榊原聰子

岩間からしたたり落つる春の水
夕空や花粉まみれの猫の皿
色づいてひと雨ごとに桃の花
菜の花や右に左に咲きみだれ
ながむれば秩父連山春の雪

鬼石　加藤ナヲ子

春昼や番犬無心に穴を掘り
闘病をやり尽くしたり鳥雲に
転勤の記念写真や鳥雲に
入り彼岸父の十八番の天狗の舞
ミモザ撮り窓より呼ばれ手土産に

さいたま　山戸美子

寒明の土やわづかに盛り上がる
春一の五感の目覚め沈丁香
乳色の濃淡となり春の山
猫の恋切なし痛し傷の痕
縁側の猫のあくびや春日中

奥山粉雪

なぞなぞに九九の応酬春休み
丘の上の母校統合しやぼん玉
明け暮れの淡淡しかる春シチュー
街路樹に木霊のけはひ土匂ふ
土匂ふ今日はここまでまた明日

大阪　遠藤人美

今は無き実家の形見蕗の薹
屋久杉の切株命繋げる芽
春一番這ひ蹲りて乗るタクシー
時を超え三代揃ふ雛の部屋
来し友に隣家の桃花お裾分け

藤沢　小島喜代子

いつの間に鉄路の端の梅真白
父母亡くも今も鎌倉山笑ふ
春服の熟女一行美術館行
見渡せば江ノ島の海山笑ふ
山寺の馳走山盛り惣の芽天ぷら

宮代　関谷多美子

高遠の桜はピンク母の頬
SLと桜と遊ぶ子らの声
記念樹の桜回廊踏み固め
牡丹餅が取り持つ縁の彼岸かな
髪につけ華麗に踊る白椿

さいたま　小駒さち子

雲離る日かげ日向の山葵沢
あしあとはおもはぬ速さ猫の恋
春日や貧乏虫も服を着て
春の日やはち切れさうなランドセル
蕗の祖父意見の合はぬクラス会

草加　持永喜夫

風の強きは毎年のこと彼岸かな
お気に入り和菓子を選ぶ彼岸かな
いつもより礼拝ながき彼岸かな
見沼田の桜回廊七曲り
あと幾度と七分桜を見つめつつ

さいたま　樋口元美

お礼参り梅の社の男坂
廃屋の根掘りの梅の花盛り
九十年てふ光飛び二月明く
別腹と宣ひ二つさくら餅
水分を摂つてとつたと風邪気配

和田仁八郎

蕺菜の十字架の白あこがるる
夏の空無言でペダル自由なる
風鈴の聞こゆる風の海と山
賄ひの不揃ひ野菜初夏の昼

所沢　関根千恵

青嵐や観音堂の床きしむ
スマートウォッチの「動け」の合図菜飯食ぶ
ありなしの風をまとへる罌粟の花
強東風や「忘己利他」説く和尚さま

さいたま　田中泰子

若き日と同じ桜を眺めをり
広げたる句帳にひらり散る桜
仏壇に母の声聞く入彼岸
彼岸の日供花を束ねる父の笑み

木村るみ子

啓蟄や並ぶ土くれ遊ぶ子ら
沈丁花部活帰りの遠き道
どろんこの小さき手見遣る春の空
卒業生おくる恩師やことば出ず

さいたま　川島夕峰

春分や巣箱にカナヘビ腰抜かす
春分やかの人この道墓参り
静寂が吹き抜けしかな山葵田を
猫の恋人の恋路を超えしかな

鈴木香音子

人の辞め職場の広く春愁ひ
落武者は知るや山葵の里の今
春分の円き陽射しや老母の背
春分や墓参の吾に向かふ猫

橋爪さなえ

春光や雪の棚田に灰を撒く
神妙に小さき手合はすお中日
葉山葵のかすかにつんと山の膳
春昼のテレビの先にある戦禍

岡田芳春

帰る雁思ひ出したる空の絵を
紅しだれ際立つ色に誘はれ
花曇り薄紅なれど風情あり
桜桃の花仰ぎ見て太宰読む

小田美智

折り紙の雛に眼入るる昼下り
岩だたみ秩父に古き遍路寺
タクシーと杖と土佐路の遍路寺
平安の面影残す雛かな

さいたま　山下ユリ子

貝寄風や御橋廊下の軋む音
地下鉄のホームへ殺到つちぐもり
三度目のワクチン辛し凍返る
久々の遠出は電車お中日

和歌山　髙橋満耶子

拘りは今日を限りに春一番
水音のたゆまず聞こゆ蕗の薹
許されぬことは承知よ花杏
去る人の机上整ひ春暮るる

さいたま　川田政代

鼻声の女の電話春の暮
忌を待たず都忘れが咲きいでて
三つ編みの少女れんげの首飾り
白無垢のむすめ五月の色直し

安藤みえこ

沈丁の香や逢ひたくて回り道
沈丁の香乗り合はせの電車かな
段々の山這ひ登る桜かな
群がりて塔浮かべたる桜かな

秋谷風舎

山葵田の水を守るや道祖神　さいたま　山川　順
春分や銀座の時計三時半
春分や独学せむとラジオ聴く
奥座敷皆で味はふ山葵漬

白魚や腹の中まで泳ぎをり　福田育子
前衛画落花椿は風に舞ふ
山笑ふ遠き山並みうす化粧

良寛の書経の文字や入彼岸　糸井しるく
雲巌寺芭蕉の宿に夕ざくら
群れ生ずる水仙の芽や空に立つ

☆

☆

俳句四季大賞
新人賞／特別賞　結果発表
全国俳句大会
最終結果発表

◎俳句と短歌の10作競詠
浅井愼平
馬場あき子

◎巻頭三句
今瀬剛一
鈴木しげを
小路智壽子
屋内修一
辻村麻乃
奥名春江

◎今月の華
相子智恵
望月　周

追悼・
稲畑汀子
岩岡中正
宇多喜代子
阪西敦子
山田佳乃

◎好評連載
南　伸坊
ねこはい
筑紫磐井
俳壇観測
坂口昌弘
忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人
句の手触り、俳人の響き
大西　朋
俳句へのまなざし
神作研一
てのひらの江戸
―古典籍を旅する
藤村公洋
俳句のつまみ
酒井佐忠
本の窓辺
二ノ宮一雄
一望百里

俳句四季
Haiku Shiki
2022年7月号
6月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

作品評

山本鬼之介

町並の風情を保つ春の雪　越田栄子

雪から抱く本来のイメージは「冷たさ・寒さ」であろうが、春の雪からは何故か温もりを感じる。それは、春という季節感がもたらす感覚的なものなのであろうか。

本句に示された町を思い浮かべると、先ず古都で代表される京都と鎌倉、そして歴史を溯っての奈良が出てくる。また、小京都と称されている「角館・金沢・松本・飛騨高山・郡上八幡・津和野・萩」などの著名な城下町もその範疇に入ると思う。町の中の疎水に沿った小径や、遺構として保存されている武家屋敷の築地塀など、春の雪の存在感を充分に示す場所が沢山あり、また、春の雪によって現代の町が昔の町に還るのである。

切腹は武士の心得初桜　染谷正信

切腹は、平安末期以降に武士が自尽する場合の風習であり、また、江戸時代に武士に科した死罪の一つとされている。本来の切腹は、自ら腹を一文字に、さらに十文字に切ることであったようだが、甚だ苦痛を伴うことなので、時代の変遷とともに江戸時代の後半には、扇子を腹に当てると同時に介錯人が首を打ち落とすという形式的な作法になったと聞いている。とは言え、武士の家に生まれた子弟は、万が一の時のために、一応切腹の作法を教えられたのかと思う。

忠臣蔵の芝居や映画の見せ場の一つである浅野内匠頭長矩が切腹する庭の桜と季語の初桜とが、読者の心を捉える。

風はらみ夢のふくらむ春コート　山岸久美子

スプリングコートは、冬のコートと違って防寒よりもファッション性に重きを置くであろうから、色やデザインが華やかになる。郊外の公園を横切る女性の春コートが、折からの風を受けてヨットの帆のように膨らんでいる。ただそれだけのことなのだが、「夢のふくらむ」の措辞によって、コートの人の晴れやかな心情が表れている。

父となる窓を開ければ初桜　横山君夫

臨月の妻が入って居る産院の窓辺であろう。春のそよ風を入れようと夫が窓を開けると、昨日まで蕾であった窓際の桜が数輪開花していた。初めて我が子を持つ男親の歓びと緊張感が「初桜」に籠められている。

時刻表ひろげ撮り鉄春休　渋谷きいち

「撮り鉄」とは、機関車や電車など鉄道の列車の写真を撮ることに執着する鉄道列車オタクのこと。列車の名前や系統番号、どの場所で撮るとインスタ映えする写真になるかなど、部外者から見れば異常に思う人種である。この句のオタクは、「春休」から判断して学生であろう。時刻表と首っ引きで目的の列車の来るのを今か今かと待ち構えているオタクの興奮度が伝わってくる。

一つづつ遊具を包む朧かな　橋本京子

昼間こども達の歓声で賑わっていた公園に夜の帷が下り、夜更けとともに朧の中に沈んでゆく。滑り台・シーソー・ぶらんこ・ジャングルジム・グローブジャングル・鉄棒・雲梯などなど筆者の子供の頃には無かった遊具もあり、一つ一つに懐かしさと時代の進歩が凝縮している。

オブラートで包まれた華奢な菓子のように、それ等の遊具を一つずつ朧が包んでいるという表現に大人の夢があり、実に素晴らしい。

蒼天や甲斐路満目桃の花　反町　修

山梨県をドライブ旅行した時の実景であろうか。晴れわたった青空を大カンバスのように詠み、そこに転々と描いたように真っ盛りの桃の花を詠んだ手法に注目した。何と言ってもリズムの良さが光っている。

つぎつぎに春を繰り出すバスの窓　丸屋詠子

このバスは観光バスではなく、市街地とその郊外を走る乗合バスではなかろうか。街の中の人々の服装、街路樹や道路沿いの木々や田畑の色合いなど、映画の齣送りのように春の景色が入れ替わってゆく様子を、「春を繰り出す」と表現したところがよろしい。

どこまでも透きとほるみづ山葵沢　元田亮一

かなり前のことであるが、サイクリングの旅で富士の裾野を走った折に、透明度百％の湧き水を見て、その清らかさに驚嘆した経験がある。この句を読んで、おそらく山葵沢を流れる水も同様だろうと思った。安曇野の「大王わさび農場」の山葵田を流れる水と、三連水車の景色が想い出される。

白魚や日の本一の斬られ役　檜鼻ことは

「五万回斬られた男」の異名でその名を世に知らしめた東映の時代劇名脇役俳優「福本清三」さんが、令和三年の元日に肺癌で七十七歳の生涯を閉じた。主役俳優に斬られた時に

大きく仰け反る通称「えび反り」が見事で、多くのファンがいた。筆者もその中の一人で、映画やテレビドラマで多くの場面を観てきた。掲句の斬られ役は、多分彼のことだと思うのだが、さて、上五の白魚に結びつく答は如何なるものであろうか。①白魚を躍り食いする際、喉に通り易いように仰けになる＝清三さんの「えび反り」。②仕事を終えた清三さんが、帰宅して白魚を肴に黙々と手酌の晩酌を愉しんでいる。いろいろと模索してみたが決定打は出てこない。

花冷えの外階段のハイヒール　梅澤輝翠

この外階段は、どのような建物に設けられたものか、先ずその点に興味が湧く。ビルの外階段をハイヒールの女性が上り下りする姿は不自然なので、二階か三階建ての一般住宅に設けられた外階段であろうと判断した。両親と同居しているハイミスの部屋に通じる外階段。恋人と夜桜を愉しみ、食事の後いろいろとあって丑三つのご帰館となった。玄関から入るのを憚り、外階段をゆっくり登ってゆく。春とは言え肌寒い深夜。ハイヒールが発する金属音が、この女性の複雑な心の内を表しているように思える。

花時の雨に君待つ喫茶店　笹本啓子

目抜き通りから少し外れた処にあるクラシックな喫茶店。店の外壁に這う蔦若葉が潤いのある雰囲気をつくっている。店内にはＢＧＭが静かに流れ、棚にはデザイン豊富なコーヒーカップが並べられていて、口数の少ないロマンスグレーのマスターが、ゆったりとした手つきで珈琲を注いでいる。恋するひとを待つ女性。二杯目のコーヒーをゆっくり飲みながら時折外を窺う。桜の花びらが水溜りに浮かぶ雨の昼下り。

人憩ふ見晴らし峠春の山　西幅公子

麓から汗をかいて登ってきた山の峠。自分が歩いてきた径が若葉の中にうねうねと続いており、彼方には、美しい里山の景色が広がっている。くつろげた襟元から入ってくる春風に眼を細め、憩いの時間を愉しむハイカー。中七の「見晴らし峠」がよい。

誘ふ目の視線あまたや雛の市　新　暦文

三月の節句の前に、雛人形や雛飾りに用いる初道具を売る季語の「雛市」であるが、現代では、東京の浅草橋やさいたま市岩槻などの専門店の売場を意味すると思ってよいだろう。雛人形を選んでいる客の視線を跳ね返すように、雛たちの熱い視線が、『買って買ってよ』と訴えている。昔に比べて一段と豪華になった雛飾りである。

旧友と再会したる駅おぼろ　　村杉清吉

数十年振りに会う親友の顔を思い浮かべて待合せの駅へ急ぐ。朧の明かりに包まれた駅頭で待つこと暫し。やってきた友人の姿を確かめながら近寄り声を掛ける感激の一瞬である。お互いに大分ひねこびてしまったが、若かりし頃の面差しは残っており、感激の握手を交わす。それからは、駅裏の居酒屋で、延々と尽きぬ話に盃を重ねたのである。

日脚伸ぶ山が落暉を持ち上ぐる　　保坂翔太

西に傾いた太陽が、やがて山脈に姿を隠そうとしている。しかし、釣瓶落しの秋とは違い、辺りにはまだ明るさが残っている。沈みそうで沈まない太陽。夜の嫌いな自分のために、山が落ちようとする太陽に待ったを掛けてくれているように感じたのである。

建国日床屋の椅子で聴くラジオ　　曲淵徹雄

床屋という言葉が懐かしい。今では理髪店か理容室であろうが、上品すぎてしっくりしない。やはり高齢者の間では、床屋の呼称がぴったりである。そして、洒落たＢＧＭよりもラジオがよい。テレビだと、客が視線を向けて顔剃りの際に怪我をさせることになりかねない。何気なく聴いているラジオから、思わぬ知識や情報を得ることがある。今ラジオから日本建国の歴史話でも流れているのかも知れない。

ディオールの美しすぎる春の服　　原田秀子

本句は、季語の「春の服」が丸ごと主役になっている。佛蘭西の服飾デザイナークリスチャン・ディオールのデザインによる春モードの服であろう。「美しすぎる」の言葉の中に、作者の憧れの気持がぎゅっと詰まっている。

紅梅の一枝を求め湯島坂　　新井孝麿

小畑実の『湯島の白梅』をつい口遊みたくなる句である。「湯島通れば　想い出す……知るや白梅　玉垣に……」の歌詞は白梅に対する紅梅が面白い。偶然の表現かと思うが、作者の悪戯心とも受け取れる味のある作品である。

山の辺の古墳ひつそり初桜　　仲田利子

名も知れぬ墳墓に寄り添う初々しい桜が物の哀れを誘う。

野の風に初蝶息をととのへる　　加藤でん治

生まれ出た蝶が、これからの試練を乗り切ろうとする姿。

水琴窟

（水明集四月号鑑賞）

池田雅夫

読札や脳裏に霞む「有為の奥山」　阿部幸代

「有為の奥山」は「無常の浮き世に迷い執着することを、深山の越えがたいことにたとえた話」と辞書にある。そして、いろは歌の一節から「いろはかるた」とした。家族でかるた取りをしている。読み手はいろは歌を脳裏に浮かべている。

山宿の格子戸のごと長つらら　鈴木玲子

雪国の軒は高い。豪雪地では、その高い軒でもすっぽり雪に埋まることがある。山の温泉でゆっくり湯治しているのだろうか。つららは「山宿の格子戸のごと」と軒を塞いでいる。そのたとえに臨場感があり、つららの迫力に圧倒された。

冬萌や枕木緩む廃線路　秋谷風舎

廃線路の傷ましさ、反比例して冬の草の逞しさには目を見張るものがある。隆盛を極めた若いころとはちがい、業を成し遂げた今は虚しく思うばかりである。枕木の間から健気に萌ゆる冬草を見て、無気力な己を奮い立たせているのだ。

髪結うて寝つけぬままに初鏡　小川洋子

新年初めて髪を結うことを「初髪」という。夜のうちに髪を結いあげたのだろう。髪を乱さないようにと一睡もできなかった。そのまま鏡に向かい、「初鏡」としたにちがいない。

寒稽古終りの礼の挙かな　森和子

寒中のまだ暗い早朝や夜間の寒さ厳しき道場で、柔道、剣道、弓道などの稽古に励み、武道を極める「寒稽古」。終わるころには気魄で全身から湯気がたちのぼる。「終りの礼の挙かな」に一所懸命に稽古に励む姿がみえてくる。

筆圧のより弱き師の年賀状　山戸美子

永年、師と仰ぎ親交を重ねてきた恩師。何より恩師の年賀状を、有難く楽しみにしているのだろう。その師も寄る年波には勝てず、力強さが失われてきたことを、筆の勢い、太さで感じている。師の体調を慮っている心境に共感する。

朝ぼらけ障子に揺るる笹の影　湯浅和

冬の朝は明けるのが遅い。日が昇り障子窓に影を落として いる。庭の木々はすっかり葉を落とし、影をもたない。唯一、笹の葉の影が障子に映っているのみなのだ。「笹の影」から屋敷のようすが窺われる。日常の暮らしに充実感がある。

大淀の風一身に冬木立つ　飯塚智恵子

大阪で「大淀」といえば淀川のこと。琵琶湖に発し、上流を寝屋川、瀬田川といい、京都からは淀川という。京都では北山颪といって、北の方角の山々から吹き下ろす風がある。淀川の岸に立つ冬木はその風を一身に受け、堪えている。

「押されて泣くな」子供元気に寒の路地　関谷多美子

子供のころによく遊んだ「おしくらまんじゅう」。その掛け声の「押されて泣くな　泣いたら負けよ」を思わず口遊んでしまった。上五の大胆な字余りも元気な子供の力の表現として勢いよくひびく。昔の子供像をなつかしく思い出した。

腰痛のいようづきて寒の入　榊原聰子

厳しい寒さは足腰の痛みにとってつらいものである。それをだましだましして堪えているのだ。上州の空っ風が身に沁みるのだろう。「寒の入」早々にうずき始めてしまった。これから寒が明けるまで堪えられるだろうかと嘆いている。

嫁が君薀蓄たるる米の味　持永喜夫

鼠は農作物、特に米を食い、家財を破損し、病原体を伝染させる。その忌み言葉が「嫁が君」で、とくに正月三ヶ日の鼠をさしていう。米の薀蓄をたれる野暮なやつを風刺。

三が日出羽三山の法螺の音　緒方みき子

「出羽三山」は山形県にある月山、羽黒山、湯殿山の称で、修験者の修行の山として有名である。山伏と呼ばれる修験者が金剛杖をつき、法螺貝を鳴らして山野を巡り歩く。正月三が日も修行のため三山を巡る。法螺の厳かな音がひびく。

新調の椀の花紋よ今朝の春　遠藤人美

新年を迎えた祝いの膳。何もかも新しくして、めでたさを慶ぶのである。お節料理をいただくその椀は、新しく揃えたもので花柄の模様がある。模様には、梅、椿、水仙、福寿草などの春を感じるものにちがいない。年酒のともとして。

冬茜ひこうき雲を光らせて　安藤みえこ

あかつき、あけぼのの空も茜に染まることがあるが、きっと夕空にちがいない。凛とした冬の夕空に一筋の飛行機雲が走る。日没後の茜空にひと際光る飛行機雲。太陽を追いかけていくかに見えたのだ。一日の充実感を思わせる句に共感。

寒椿挿す一輪の仄明かり　糸井キヌエ

「寒椿」といっても特別な種類ではなく、寒中に咲く早咲きのもので、冬椿ともいう。「寒椿挿す」で一句とする。あえて「一輪の仄明かり」とし、寒椿の一点の紅を強調している。

網野月を　選

山紫集

鶯や縁側でむく茹で卵　森　和子

春告ぐる鳥や孤食もまた良けれ　正木萬蝶

鶯や人遠ければ恋に酔ふ　青木鶴城

師も弟子も一音足らぬ匂鳥　山中いちい

鶯や鎖の梯子登るとき　山田美佐尾

点呼とる瀞に鶯谷渡り　大塚茂子

鶯や休め休めと夕鳴きす　飛永　鼓

初音かな分去れの碑に歩を止めて　斎藤みよ

鶯に畑の農婦は腰伸ばす　岡田宣子

野仏も耳澄ましたる初音かな　横山礼子

——以上特選

鶯や直に見ゆる黒地蔵　曲淵徹雄

昨日より今朝の上手さよ匂鳥　町野広子

鶯の瑠璃放つごと鳴ききりぬ　松井由紀子

初音聞くかくて佳き日の始まりぬ　丸山マスミ

鶯の鳴き止み姪の声来たる　宮崎紫水

鶯の囀や身の透きとほる　宮崎チアキ

初音聞く筆の止まりし写経かな　村杉清吉
鶯や鴉雀は枝を去れ　井口俊晴

鶯や空也上人南無阿弥陀仏　本橋稀香
北国のしばらく後れ初音かな　池田雅夫

鶯に応ふ口笛旅の空　森川義子
鶯やととのへてゐる吸気呼気　石川理恵

山路行き鶯の声励まされ　森下美智枝
初音聞く猫八押しの夫の笑み　石田慶子

鶯の今朝の初音を病棟に　森本早苗
山中や鶯群は交信中　上戸千津子

鶯の飛び交ふ里を朝のバス　山岸弘子
裏庭に経読み鳥や有り難し　宇田白鷺

鶯や朽ち果てさうな道しるべ　湯浅　和
鶯や少女の耳朶の青白く　内田恵子

茶柱と初音の朝の至福かな　新　暦文
鶯の裏藪からの目覚めかな　梅澤輝翠

鶯や一声あげて去ぬるとは　阿部幸代
初音かな敲つ銀の耳飾り　梅澤佐江

うぐいすやラナンキュラスの庭で啼く　新井孝麿
もう一声息つめて待つ初音かな　大場順子

鶯の次の声待つ散歩径　新井倶子
鶯のこの枝好きでしがみつき　岡野順子

杣道を鶯一羽先導す　飯田忠男
うまご背に一升餅や鶯なく　榊原聰子

ラケットに呼応してゐる匂鳥　葛城千世子

鶯の谷渡りけり過疎の里　加藤でん治

鶯と思ふ竹笛田舎の子　川村　治

鶯声や庭の老梅咲き満つる　木村るみ子

鶯の声にコロナ禍幸少し　熊倉千重子

鶯や色を忘れし我が狭庭　河野はるみ

胸張るる初音の記録危ふしや　小駒さち子

鶯や背黄青鸚哥は籠の中　越田栄子

鶯啼く富士の全容正面に　後藤綾子

鶯の初音に引かれ男坂　近藤徹平

鶯の声がかすかに風の中　笹本啓子

鶯の啼き真似や藪応へず　渋谷きいち

鶯と私と藪を鳴き交す　下川光子

鶯の初音駆り出す野良仕事　菅原卓郎

鶯のまだ舌足らずケキョケキョキョ　菅原真理

うぐひすを見れば息子と顔が寄り　杉浦理恵

鶯の声響くなり陶鳥居　鈴木和子

鶯の声音もどかし藪の中　鈴木藻好

先輩の恋の手解き匂鳥　諏訪サヨ子

鶯や終の棲み処の鎌倉の　関谷多美子

鶯に立ち止り又歩き出す　瀬戸雄二郎

鶯のこゑが破りし朝熟寝　染谷正信

鶯や天は二物を与へざる　反町　修

初音聞く五百羅漢の泣き笑ひ　高島寛治

春告鳥インコと競ふ「ホーホケキョ」　高橋満耶子

鶯や廃墟の庭に清んだ声　武田重子

鶏鳴に負けじと鳴くも初音かな　田中章嘉

鶯や山の吊橋揺れて啼く　鳥羽和風

幼気（いたいけ）な歌声披露初音かな　外村紀子

鶯や山路の先導するごとし　仲田利子

古里の山に谺す鶯かな　南條きわゑ

世界遺産の大師の山に聞く初音　西浦千枝子

鶯の声に飛び出す谷の宿　西幅公子

小ぶりなる初産み卵初音聞く　野口和子

「ママはどこ」少女は闇へ初音かな　野田静香

鶯や疎開先なる父の里　野平美紗子

息弾ませて林道行かば初音かな　野村美子

鶯や鎮守の杜に集合す　橋本京子

うぐひすやコロラトゥーラの響きあり　原田秀子

鶯は恥づかしがり屋森の中　樋口元美

鶯と朝の光を待ちてをり　日高道を

鶯のこゑをガイドに尾瀬ヶ原　福田千春

鶯の喉持つ小唄勝太郎　藤澤喜久

鶯や源氏山より光る海　保坂翔太

梅の香が名残惜しいかしづり雪　飯田忠男

☆　☆

山紫集作品評

網野月を

鶯や縁側でむく茹で卵　　森　和子

秀句である。上五の季語と中七座五の句意の重量感が匹敵していてバランスの良い句になっている。上五の季語プラス「……や」切れ字は相当に重量感があるのだが、中七座五の日常の作者の所作を叙述した景がしっかりと上五を受け止めていて、揺るがない。

朝なのか、午后なのかは読者の想像に任されている。卵の数は一つであったか、いくつかあったのかも任されている。つまりどちらでも良いということで、ただこの卵はツルっと綺麗に剥けたであろうことは確かなのである。

春告ぐる鳥や孤食もまた良けれ　　正木萬蝶

「鶯」は傍題の多い季語であり「春告鳥」とも言い、掲句はその「春告鳥」を更に「春告ぐる鳥」といい換えたものである。その鶯の声が聞こえてきたのである。孤りで食事をしていればこそ、その微かな声が聞こえたのであり「孤食」の気ままさと共に、「良けれ」とまで言い放つこととなったのである。それほどに「孤食」の境遇と鶯の声の嬉しさとが綯い交ぜになった何重にも複層する心境が叙述されている。

鶯や人遠ければ恋に酔ふ　　青木鶴城

「鶯」の傍題に人来鳥があり、古今の頃は「ひとくひとく」と鳴いていたということである。折角の囀りを梅見の人に邪魔されている、という滑稽な解釈が後に成立するわけで掲句の趣に通じるものがあるように考える。掲句の場合は、滑稽と言うよりも「鶯」への思い遣りがテーマである。

師も弟子も一音足らぬ匂鳥　　山中いちい

「師」に当たる先輩の鶯もまだ囀りの整わない後輩の鶯も「一音足らぬ」ということである。一般に鶯の「笹鳴き」は冬の季語、「初音」「鶯の谷渡り」などは春の季語に分類されていることが多いようである。掲句の場合は、「ホーホケキョ」を連想させる。

「鶯」では四音であるから「匂鳥」にして一音足したのであろうか。句の意味はより深読みの出来そうな陰影を含んでいる。

鶯や鎖の梯子登るとき　　山田美佐尾

いわゆる登山の際の鎖場に類するものを想像した。早春であろうから登山にはまだ尚早の季節である。筆者は、人里に

近い軽装でも登れるくらいの小山を想像した。ここまで来てよかったなあ、という作者の心持ちが横溢している。

点呼とる瀞に鶯谷渡り　　大塚茂子

上五の「点呼とる」は「鶯」の声が作者ご自身にそう聞こえて来るということであろうか。それとも句の設定条件となる景の上での叙景であって、例えば遠足で来ている小学生の一隊に引率の先生が「点呼」を取っていたのかも知れない。

それはともかく「瀞」というと埼玉県人の筆者などは直ぐに秩父から寄居に下る荒川筋の長瀞を惹起する。「谷渡り」はケキョケキョのそれであろう。掲句の場合、この景は谷間を渡るのではなくて「瀞」を渡っていて、鶯の縄張りが右岸左岸に展開していることが解かる。声を追う作者の所作が見えてくるようである。

鶯や休め休めと夕鳴きす　　飛永　鼓

中七の「休め休め」は作者ご自身がそう聞こえたということであろう。座五の「夕鳴き」から一日の労働が終わろうとする頃の心地よい体の疲労感が窺い知れる。確かに体には疲労が感じられるのだが、仕事の捗り具合や遣り甲斐から齎される充実感が、囀りを優しい言葉に聞き取る作者の心のゆとりを引き出したのであろう。

初音かな分去れの碑に歩を止めて　　斎藤みよ

中山道から北国海道が分かれてゆく追分のことであろうか。いわゆる「分去れの碑（わかされのひ）」には、道祖神や地蔵尊の台座石などが集まっているのである。周知の通りである。文刻には「さらしな」「みよし野」とあって、「碑」というだけで花と月を暗示している。「初音」に加えて花と月が一句に収められていて、出来上がり過ぎの句なのである。

鶯に畑の農婦は腰伸ばす　　岡田宣子

一句仕立てのリズムの句になっている。座五の「……伸ばす」の句意が反映されているようでもある。一句仕立てのリズムの句は、簡単に叙述されているように読めるのだが、狙って作句しようとすると、中々出来ないものである。

上五を「……や」切れにする手法も考えられるであろう。「……に」にしたことに拠って、作者がその景を初めから終いまで見届けたということになる。声と景の間合いに両者の関係性が緊密であることを叙述しているのだ。「……に」に拠ってリアリズムに近づいた。

野仏も耳澄ましたる初音かな　　横山礼子

上五に「野仏も」とあるので、作者自身も「初音」に聞き入っているということであろう。多分、作者以上に永い歳月をその地で過ごしてきた「野仏」にとっても、「初音」となれば聞き入ってしまうものなのであろう。少なくとも作者にはそう見えているということである。

大村節代　選

鼓笛集

吾妻橋くるま屋さんの頬被
筒抜けのややの産声牡丹の芽
棚霞ビルの天辺浮き上がる

武田重子

風船売キュキュッとねじりカンガルー
何んとまあ猫を背負ひし山登り
飛行機雲山越え野越えゴム風船

西幅公子

夏立つや三番札所の磴険し
天守閣の白壁眩し夏に入る
二胡に合はせ唄ふ「ふるさと」夏来る

田中泰子

芝青む高齢者施設に出かけます
スケッチの風に捲られ春の芝
若芝に街は染められ空青く

北山建治郎

風光るなんども昇るすべり台
青き踏む我が手の中の小さき手
北窓を開けば彼方走る貨車

湯浅　和

あえかなる竹馬の友や春惜む
花の門スーツの似合ふ十九歳
ややとママ手と手をつなぐ目借時

綿貫ひさの

彼の人と回し飲みけり山清水
山ひとつ浄土の如き躑躅かな
木下闇四十九日の樹木葬

新　暦文

肩車おりて駆け出しぶらんこへ
みるみると古墳の丘はしやぼん玉
春空に大道芸の白き棒

橋本京子

一家総出空き家のごとし田植時　梅澤輝翠
早乙女の朴葉飯喰ふおちよぼ口
田植終へ野良着脱ぎ捨て五右衛門風呂

海の夢運ぶ線路や花しどみ　阿部幸代
日帰りの郷の蕗味噌添ふる夕
春暮るる「市史」と我が身の今日この日

気高しや一人静の舞ひ姿　諏訪サヨ子
久女句のこれぞ楊貴妃桜かな
射干の庭に居並ぶ御公家さま

田舎から花の東京巣立鳥　千坂平通
麦飯や幼き頃の父母の顔
夏来る眩いばかりの白き空

宴はね足のもつれや花疲れ　佐藤克之
春の星呆けた母の童歌
摘草に赤貧の日々母健気

慎みて長寿の友の新茶汲む　安倍弘夫
プロレスの夢醒め探す夏布団
青嵐や一泡吹かす快男児

長閑しや峠の茶屋の緋毛氈　鈴木藻好
桜貝拾うた日こそ嬉しけり
春満月町おこしの企鼓舞さるる

特集　南風・夕立・雲の峰…
夏・天文の季語に遊ぶ
追悼企画　追悼・稲畑汀子
巻頭作品10句
今瀬剛一・岸原清行・鈴鹿呂仁
辻 恵美子・対馬康子・名村早智子
山西雅子・山本一歩
俳壇
7月号
6月14日発売
定価900円（税込）
巻頭エッセイ
江崎紀和子
八木健選　滑稽俳壇
四季巡詠33句（第Ⅲ期）…佐怒賀正美・武藤紀子
連載
色の歳時記……池田澄子
俳句文法　そこが問題、そこがポイント……井上泰至
俳句史を見直す……秋尾　敏
ものがたりのある俳句……山西雅子
先人のことば……対中いずみ
小説・遥かなるマルキーズ諸島……マブソン青眼
俳句と随想12か月　河原地英武・長島衣伊子
本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

鼓笛集作品評

大村節代

吾妻橋くるま屋さんの頬被　武田重子

吾妻橋は隅田川にかかる朱色の美しい橋である。浅草寺から客を乗せて橋まで来たのだろうか。句の舞台が浮かんで心楽しい。「ちょいとお待ちよ車屋さん……」で始まる美空ひばりの歌が口をつく。

ところで近頃の車屋さんは、若くてハンサム揃いで、追っかけまでいるとか、驚きである。

風船売りキュキュッとねじりカンガルー　西幅公子

水素を入れたゴム風船を器用にねじって、風船売りのおじさんの手から色んな動物が生まれる。

今度は何かなと子供達は目をキラキラさせて、おじさんの手元を見つめる。あっカンガルーだ。おじさんは手品師かなと思わずため息をつく。「キュキュッ」の効果音が何とも臨場感があふれて、楽しい句に仕上がった。

二胡に合はせ唄ふ「ふるさと」夏来る　田中泰子

近ごろ静かなブームと言われる中国楽器二胡、そのやすらぐ音色は心に響く。今日は二胡の伴奏で「ふるさと」を合唱。しみじみ母さんを思った。

鼓笛集巻頭（五月号）

私の好きな一句（自句自解）　笹本啓子

母の倍生きて形見の秋袷

八十歳も幾つか過ぎ断舎利を考えて居る今日このごろですが、私には処分出来ない物があります。それは母の形見の秋袷です。

眺めていると幼い頃の母との思い出が蘇り懐かしさが込み上げて来ます。茶箱から出して見ても、又仕舞い込んでしまいます。

いずれ私の物と一緒にと、娘に託す事にしました。

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木和子　報

熱き茶を夫に供ふる桜冷　由紀子
花冷や小路に入る灯油売り　〃
たどりたる系譜の末尾うららけし　和　葉
花冷や受けてしまひし長電話　〃
花冷の夜を絢爛と咲く大樹　治　子
道行の舞台さながら桜冷　〃
系統を守る里人や滝桜　稀　香

――以上特選

桃の花母系を受けてぽつちやりと　順　子
しやきつと立つ理系の女花の冷　和　葉
家系図は疾うに無くなり彼岸過　はるみ
酒に弱きは父の系統春の宵　マスミ
人形にビーズの目あり花の冷　喜　恵
素うどんに固茹で卵花の冷え　延　昭
花冷や疑ひ深き尋ね人　節　代
何時の間に家系断絶仏生会　徹　平
上州の山影険し花の冷え　理　恵
青系統の帯締めを選る春袷　治　子
檻の隅固まる獣桜冷え　稀　香
ほろ酔ひのあとの花冷おごそかに　光　弥
大学受験迷はず理系と決めてゐし　和　子

第二例会（東京本所）

青木鶴城
太田絹映　報

花筏船の中まで染まりゆく　敏　江
髪白き婦人の家に花水木　〃
無機質の街に住み慣れ春の雲　峰　雄
ハンドルを切らば二列の花水木　鶴　城
ここにもか暗証番号春朧　竺　仙
墨東や路地の多くて猫の恋　玲　子
空一面綿菓子のごと春の雲　サカエ
グラデーションに明けゆく空や花水木　道　子
砲火無き空の蒼さや花水木　みどり
高音を残す飛球や春の雲　峰　雄
瀬戸内や入り日の染むる春の雲　いちい
水たまり波紋となりし春の雲　鶴　城
朧げに空に溶け込む春の雲　敏　江
バス停に女子高前と春うらら　竺　仙
銀翼の白く尾を引く春の雲　玲　子
富士やまに会ひにゆきたし春の雲　士　史
花筏のかもめ連れ行く川面かな　サカエ
滑らかにスワンの舟のゆく四温　道　子
海渡り幸せ運ぶハナミズキ　美　代
おうい雲暮鳥をまねて呼びかくる　利　子
志はいづこ八十六才春　米　子
花水木利き手に受くる和三盆　みどり

――以上特選

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

一本の桜大樹の名所かな　雅　夫

正直を取り柄と称し四月馬鹿　雅夫
科学者も木偶も舌出す四月馬鹿　喜久
花占ひ最後は「嫌い」四月馬鹿　大場順子
初蝶に肩貸してゐる山男　昇
賢妻も愚妻と呼ばれ四月馬鹿　〃
ラインアプリで喧嘩の夫婦四月馬鹿　〃
——以上特選

妻と書くつもりが毒に四月馬鹿　徹雄
ロボットに心盗まれ四月馬鹿　喜久
余生など知らぬ幸せ万愚節　康世
言ひ訳の二転三転四月馬鹿　雅夫
万愚節ＡＩ答ふ電話口　大場順子
四月馬鹿書架に春画の真新し　萬蝶
戦争のライブ中継万愚節　理恵
千歳のいのち狂ほし滝桜　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

白壁の続く坂道桃の花　美佐尾
春雷や学生服の金釦　〃
縁先に座布団二枚桃の花　由紀子
桃咲いて双子の眠る乳母車　寛治
春雷や無骨の父に女客　暦文
春の雷門（かど）のペコちやん舌を出す　延昭
幕開けの拍子木に似て春の雷　光弥
——以上特選

春雷一閃水面に罅の走りけり　マスミ
春の雷名手が的を外しけり　翔太
リハビリの仕舞は散歩桃の花　でん治
春の雷番犬耳を伏せしまま　寛治
女身仏の紅さす化粧（けはひ）春の雪　光弥
甲州路車窓満目桃の花　修
桃の花内ポケットに宝くじ　光子
春雷の遠鳴りばかり山暮るる　由紀子
窯出しの走る火襷春の雷　順子
途中下車叶はぬ故郷桃の花　昇
桃の花少女逃げ込む保健室　恵子
縄電車のここが終点桃の花　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

若草の息吹に命昂ぶりぬ　玲子
渡し舟春深みゆく水の照り　〃
日と月と同じ空なり若草野　水尾
新たなる出合ひに馴染み春深む　宣子
風清し優駿駈くる若草野　佐江
春深し弥勒菩薩の思惟の指　〃
若草にまろぶ少女の未来かな　〃
——以上特選

若草やきらりと躍る稚魚の群　水尾
若草や試歩の一歩の嬉し泣き　義子
放牧の牛のびのびと若草野　玲子
言の葉の無き楽の音を春深し　理恵
若草や大地のいのち立ち上がる　宣子
果実酒の甘味の増して春深し　美佐尾
新築の庭木青青春深し　はるみ
用水に水溢れしめ春闌けり　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

囀の樹下に結婚相談所　佐江
囀や別れ話を聞くベンチ　慶子
手の平に覚えし文字を書く四月　京子
園児らは囀の下初恋を　理恵
花筏かつて不浄門なる三文字　ひろこ
八百比丘尼祀る小字や桃の花　マスミ
囀や小枝が恋の橋渡し　はるみ
囀の木の天辺の孤独かな　萬蝶
——以上特選

さへづりや能く能く見れば三羽をる　月を
囀や桂子・好江の撥捌き　慶子
囀や色とりどりの山ガール　鶴城
囀の降る調神社かな女句碑　マスミ
字余りも字足らずもありうらうらら　はるみ
囀に台詞が浮かぶメロドラマ　理恵
故郷は字のつく村遠霞　俊晴
命名に字画を数へ春生まれ　紀子
囀るも悲恋に暮れる鶯や　儀勝
字のつく村に移住や土筆摘む　千春

囀やここに二宮金次郎　京子
シスターの胸の十字架風光る　佐江
人工の森に囀道しるべ　ひろこ
彼の人の字愛しや春灯し　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

体内の時計乱調暮の春　ゆら女
古き恋偲びし暮の春の夕　洋子
暮れ六つの風紋崩す花の雨　玲子
原稿に数多の朱筆暮の春　道子
襟足剃つて男を上げる桜冷え　和子
桜大樹渾身の意地見せてをり　早苗
スニーカーの紐取り替へる暮の春　〃

――以上特選

逢魔時無風を揺るる紅枝垂　早苗
雲雀鳴く埴輪の並ぶ墳丘墓　玲子
町騒のほど遠く有り暮の春　礼子
摘草の冠作り童唄　千津子
大切な花瓶に罅やゲルニカ忌　ゆら女
今しばし憂さを忘れて花吹雪　洋子
登り来し坂ふり返る暮の春　千枝子
入学式新たな道を自転車で　千世子
待望のケーブルカーや花の寺　満耶子
この世相思ひめぐらす多喜二の忌　きわゑ
徒渡る少女脚長暮の春　和子
暮の春戻つてこないブーメラン　道子

昔話あれこれ16

水歯別命、隼人の曾婆加理を誅す

曾婆加理を連れて大和に上る途中、大坂山の入口まで来た時、「曾婆加理は私のためには大手柄を立ててくれたが、自分の主君を殺したのは君臣の道に悖る。しかし手柄に報いないのは誠意がないことになるが、約束を実行すると、粗暴な隼人で主君を裏切った曾婆加理は将来何をするかわからない。その手柄に報いることはしても、生かしてはおけない。」と曾婆加理の処遇に悩むが曾婆加理に、「今日はここに泊まり、お前に大臣の位を授けて、明日大和に上ろう。」と伝えた。水歯別命は、至急そこに仮宮を造り、酒宴を開き、その場で曾婆加理に大臣の位を授け、多くの官人たちに、拝礼させた。

そして「今日は、大臣と同じ盃で飲もう」と大きな盃に酒を注ぎ、酒を頂こうとして、おおきな盃で曾婆加理の顔が隠れた隙を見て蓆の下に隠しておいた刀で彼の首を刎ねた。（計略による勝利は、倭建命が、熊襲建兄弟を女装してだまし討ちした話にもみられるように、古事記では英雄の条件として、肯定的にとらえている。）

翌日、曾婆加理を誅した穢れを濯いで清め履中天皇に約束を果たしたことを報告し、二人は親しく語らった。

履中天皇崩御の後、水歯別命は即位して反正天皇と称した。

同母弟・男浅津間若子王の即位

反正天皇崩御の後、即位したのは同母弟男浅津間若子王であるが、即位が決まった時に辞退した。それは長い病を罹っていたからである。しかし、后を始め、臣下達が、即位されるよう強く奏上したので、止む無く即位した。允恭天皇である。

その時、新羅の国から貢物を積んだ八十一隻の船が到着した。その中に金波鎮漢記武という薬の処方に詳しい人が乗っており、天皇の病を直した。

こうして長寿を授かった允恭天皇は氏姓の整理をした。当時勝手な名前を名乗る者が多かった。それを正すために盟神探湯という呪術を用いた。偽りを述べると、熱湯の中に手を入れた時ただれるというものである。

こうした功績を残し天皇は七十八歳の天寿を全うした。（つづく　丸山マスミ）

各地句会

めだか句会（浦和）

若草や急須に開く陽の香り　八千代
若草を踏みて幼子つんのめり　はるみ
滝桜目の前にして声のなし　美智
若草や跳ねる雀に潜む猫　謙一
若草へ一歩踏み出す青パンツ　育子
ティキティキと春の泊の朝の鳥　敦子
若草や優しき風に恋心　智子
若草に何を探すや仔犬の尾　真由美
蟇出づや去年のお前ではないな　月を
行く春や解けない恋の方程式　鶴城

柿の木塾（浦和）

献血に年齢制限残る花　恵子
朝寝してなけなし余生縮めけり　光弥
残花なほ絵島屋敷の格子窓　昇
怠け癖言訳少し朝寝する　俊晴
美しき時はほんの一時はや残花　節代
夕富士の湖にくつきり残る花　かつ子
朝寝して自づと一日二食なり　和葉
源流の山森閑と残花かな　水尾
鳥の来るうつらうつらと残る花　和子

神戸大池句会（神戸）

城櫓背に若桜凜と立つ　早苗
公園のホームめきたる花見かな　礼子
懐かしや田の畦似合ふれんげ草　千津子
花冷や色硝子背に修道士　玲子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

春の風邪湿り気のなきハムサンド　延昭
右書きの虎屋の暖簾利休の忌　正信
擽られ果ては抓られ朝寝かな　俊晴
初蝶や新婦の父の燕尾服　美枝子
鳥帰る遥か彼方のウクライナ　倶子
東山鐘音を聞く朝寝かな　健司
喉にある昨夜の諍ひ春の風邪　早都子
双子の子父に手と手を春の風邪　淑子
故郷や遺影の下の大朝寝　昇

珊瑚の会（浦和）

沖ノ島の姫宮恋うて飛魚のとぶ　マスミ
滑空のあごの壮観夕映す　水尾
飛魚干して元寇の浜暮れ泥む　昇
飛魚や海より生命誕生す　恵子
若楓雀すずめの鳴く未来　光子
若楓隣家に赤子生まれたり　史代
学帽の校章光る若楓　和子
飛魚のここぞと舟の横を飛ぶ　広子
若楓大きく開くる書庫の窓　和葉
あご飛ぶや沖の人魚に恋をして　かつ子
若楓一葉あしらふ会席膳　喜恵
若楓人に頼らず一万歩　節代

俳句の手ほどき（岩槻）

一重山吹山路半ばの小休止　延昭
面影草垣根越しなる美しき人　倭子
はらはらと悲恋を伝へかがみ草　佐江
砂利船の沈み加減や春の海　水尾
野仏の天蓋をなす葉山吹　義子
山吹や忍野八海暮れ泥む　ます美
藩校をしのび飛び石濃山吹　徹平
手折り来し八重山吹に遺影笑む　忠男
濃山吹むかしのままの水車小屋　翔太
かげろふや沈み橋ゆく郵便車　卓郎
山吹や水車小屋ある里に雨　美子
春惜しむ沈む夕陽に時あづけ　桂子
石けりの跡に山吹咲きこぼる　幸代
山吹や天女のごとく川岸に　久美子
悪女ともなれず山吹凝視して　かつ子

りんどう俳句会（浦和）

囀のテナー木霊す鎮守の杜　弘夫
ふらここを設ふ農の屋敷林　翔太
月光の誘ひに震ふ夜の鞦韆　徹雄
天に囀り地に幼児の弾む声　治子
ふらここや漕いで発見新天地　寛治
ふらここや夫の育休今日限り　君夫
ぶらんこの往きては帰る夢うつつ　卓郎
相乗りの夜のふらここ遠灯影　正信
ふらここの子等が背押す老後かな　サヨ子
囀や国境越えて届けたし　紀子
囀や森いつぱいの愛の歌　利子
囀の色占ひの今日の色　順子

水明澪つくし句会（大阪）

耐へ抜きし夜来の雨を花万朶　洋子
つくし野へ心の痛める嫁さそふ　智恵子
春灯や女将の拭ふ泣きぼくろ　人美
待ち合せ川面に映ゆる春の灯よ　美令
咲き満ちてもこもこと揺れ桜花　富士桜
快速の窓に分けゆく花明り　ゆら女

円卓の会（浦和）

磯遊び沖に留まる貨物船　亮一
蘆の角風孕みゐる帆引き船　翔太
春愁や舟押し出すも櫂持たず　輝翠
春陰やいや増す思ひ届かざる　修
スキップの八分音符や春の虹　静香
少年は悪事を知らず蘆の角　道を
葦牙や水面わづかに押し上ぐる　月を
春愁や転勤告ぐる朝のお茶　鶴城

花衣の会（浦和）

亀鳴くや同じ行を夢うつつ　みよ
藤棚やバンジョーを聞き二、三曲　京子
賀茂川に薄紅流す糸桜　みち
亀の鳴く薬一粒見うしなふ　峯雄
来年も会ひにくるぞと花に告げ　治
産卵を亀は鳴きつつ終へにけり　章嘉

水明松本句会（松本）

美しき並列残し鳥帰る　陽子
満開の桜の下でハックション　マリス
甘酸つぱい香に包まれて苺狩　玲子
しなやかに過ぎる黒猫黄水仙　寿子

皐月の会（浦和）

伊勢路来てまほろばの中春の昼　美佐尾
誰か吹く細き口笛春の昼　珪子
春昼や午後の日課の物憂くて　順子
春昼や眼鏡もずれて転た寝す　紀子
木洩れ日のガラス工房春の昼　静香
雛市の雛と吾子の眼似てゐたり　孝麿
鳥の巣を宿す大樹の五百年　暦文
和菓子やの暖簾の奥に飛花落花　きいち

たかんな俳句会（川口）

引出物開く夢あり桜鯛　久美子
桜鯛ま顔で我を品定め　のり子
お食ひ初め叔父の祝ひの桜鯛　小麦
朧月美しきソナタに聴き入りて　勢津子
ちと遅き帰り道なる朧月　和子
定年の労をねぎらふ桜鯛　義子
路地裏のひそひそ話朧月　鶴城
纜（ともづな）の海を打つ音おぼろ月　水尾
御食ひ初め小さき器の桜鯛　静香

ミモザの会（横浜）

連弾の指先ひかる春の宴　栄子
ほろほろと身を崩し食ぶ鰊かな　亜弥子
この一帯鰊御殿とガイド言ふ　慶子
下り坂かけぬけてゆく春日傘　由美子
誰が捨てし鰊曇に破れ網　萬蝶
かくれんぼ屈めば草の芽ここかしこ　玲子
鰊ぐもり今も昔も戦あり　史代
おすとめす当てつこ鰊焼けるまで　千春

芙蓉句会（浦和）

春の雲外賑やかに子等通る　正子
春の雲夫は亡母の懐に　道子
もう一品季のもの添へて花の膳　税子
駿河の海春雲写し涙色　仁
春の雲ほつこり浮かぶ筑波山　ともこ
品定め春の河原で石文を　文子
墓石の黒きにぽつかり春の雲　美子

野ばらの会（浦和）

前向きの刺戟呉るるや緑立つ　和子
緑立つ風ゆるやかに御用邸　茂子
老松や赫灼として緑立つ　秀子
遥か沖見据ゑる少女緑立つ　栄子
マスターの豆挽く音や緑立つ　夏江
山寺の石段に添ふ初緑　みき子

青葉の会（浦和）

春風や雲間に光突きささる　森山洋子
抜け道は花大根の細き道　美紗子
ショーケース細工みごとな春の菓子　真理
細川紙なる短冊や春深し　美智枝
細腕が今や太腕はる日傘　美子
川下り項撫で行く春の風　啓子
じやれ遊ぶ牧の子馬や春の風　公子
晩春や夕日一筋日本海　和子
春風にサイクリングで土手疾走　洋子
連弾の足浮く姉妹チューリップ　輝翠

光が丘俳句教室（東京）

亀鳴いて深夜放送まだらなり　はる
飛花落花死出の旅路は盛装で　康子
花は葉に米軍跡に今暮らす　典子
三回目ワクチンの日の花の雨　理恵

きざきサークル（浦和）

春駒の明日を信じひと撫です　光子
馬の仔や納屋に置きある飼葉切り　倶子
赤い靴のメロディ流れ街おぼろ　啓子
厩舎では出産ラッシュ春の駒　喜代子
朧月鏡のうらに人一人　タイ
朧の夜予感がさえて届く文　和枝
塩岬夕陽朧の旅の宿　かつ子
負けん気の仔馬の白き鼻柱　和子

若鮎句会（浦和）

住む人の途絶えて久し竹の秋　芳春
旅立ちの祝の膳の鰆かな　香音子
ゆるふわの風に洗濯竹の秋　さなえ
子どもの日八景島の夕日かな　順
蕭々と風の流るる竹の秋　亮一
口の端にちよつと味噌つけ鰆焼　稀香
海を出てバター塗れの鰆かな　拓真
夕餉には西京漬の鰆かな　悦子
借景の富士の高嶺の忘れ雪　月を
割烹着の女将おしやべり鰆刺　鶴城
竹の秋意見の合はぬクラス会　喜夫

芽吹句会（浦和）

花ぐもり鶯張りの音こもる　千重子
花曇り前頭葉の怠け癖　玲子
花曇鏡の奥を拭く女　ひろこ
会える日が一番いい日花曇　正子
今年また桜並木を笑まふ母　修
人声消えて桜回廊独り占め　富子
独り居の開かぬ雨戸や花曇　チアキ
モナリザの微笑の中に春愁　道を

りそな俳句会（浦和）

還暦や自分探して春惜しむ　建治郎
若芝に寝転んで聴くビートルズ　暦文
若芝へ寝転ぶ二人恋模様　京子
新調の上着をそつと春の芝　道を
惜春や小魚残る潮溜り　寛治
約束を果たせぬままに春惜しむ　雅夫
若芝やぴんこしやんこと跳ねる牛　久美子
若芝に弾ける笑顔子らはしやぐ　勲
若芝に寝て大空を独り占め　マスミ

鶴川山百合句会（町田）

写生の子筆を放りて土筆摘み　雄二郎
行き付けのボルシチ恋へば春の雷　月を
瘡蓋の剥がれて痒し春の雷　喜久
底抜けに明るい女春の雷　史代
つくし摘む太き声持つ元婦長　広子
ひよろ長き土筆となりぬ塾隣　千春
つくづくし古都のはづれのまたはづれ　萬蝶
春雷を聞く人生に岐路いくつ　理恵
梅園の一木「不明・白」の札　美千子
つくづくし赤子つんつん宙を蹴る　玲子

水明熊谷句会（熊谷）

半玉のゆれる簪桜貝　秀子
実盛の子孫は農家麦青む　燈女
小瓶の中にあの日の君と桜貝　栄子
唐丸の往きし街道麦青し　徹平
すぢ蒔きの青麦畑鮮やかに　正行
空知野は見渡すかぎり麦青む　茂子

繭の会（浦和）

朧夜に安倍晴明古都の風　翔太
あさり吐くみんな嘘ある二つ三つ　まりこ
すてられぬ宝石箱の桜貝　夕峰
酒旨きあさりはまぐり佃島　比早子
花曇老舗の茶屋に客見えて　トエ
酒蒸しの浅蜊もてなすそばの会　風舎
蛤の潮吹く音のきこえる夜　粉雪
あさげの椀両手に包みあさり汁　さよ子
十八歳に成人式なし花曇　月を
弁当の下拵へや花曇　鶴城
冷戦の影忍び寄る花曇　小林京子

櫻蔭句会（浦和）

晩春や遠くそびゆる青き山　千恵
晩春の飛鳥の里の石舞台　美子
紙風船絵本ままごと雨の日は　多美子
風船売キュキュッとねじりカンガルー　公子
鎮魂の想ひをのせて鳩風船　道子
晩春やものやはらかにご挨拶　由紀子
晩春やもの寂しげな温泉街　美智枝
晩春や船すれ違ふ隅田川　茂子
紙風船ぽんと弾みて外は雨　真理
風船のふはりとあがり子は背伸び　幸代

櫟の会（浦和）

春の星氷川の杜の能舞台　文子
取り壊す団地に桜咲き誇る　富美子
春星のうるむ一つを句友とも　千重子
辻褄の合はぬも楽し花見酒　敦子
桜花満を持しての競演よ　妙子
乳色にかすむ吉野の山桜　朋子
神木となりて崇むる滝桜　裕誌
青空に雲一朶ゆく花吹雪　彰二
夜桜や昔懐かし京小町　克之
あらうれし野点の席にさくら舞ふ　富子
悲語聞くやライトアップの糸桜　治子

山茶花（浦和）

孫と猫の名前間違ふ万愚節　泰子
風染めて足元染めて芝桜　マスミ
コロナ禍のニュース色々万愚節　美江子
ロシアより息子帰りて芝桜　清一
用のない電話あちこち四月馬鹿　光子
だまされるふりして終る四月馬鹿　綾子

蝌蚪の会（浦和）

藤浪やスクエアダンスてんでんに　ひさの
雨逝きて朝寝醒の藤の花　風舎
浅草寺煙掬ひて春惜しむ　しるく
春深しカップ選びてミルクティー　さち子
シーソーのリズムゆつくり春深し　朝香
春深し隣りの猫の朝帰り　元美
春月夜汝の暗号の鍵探す　礼子
暗黒の穀倉地帯春の雷　るみ子
山姥の棲みたる気配深山藤　月を
旅二日灯に映ゆる城と藤　鶴城
左巻き右巻きさぐる藤の蔓　宣子

野菊の会（与野）

八重桜君より遅れ泪ぐむ　美代子
春怠慢尾を持て余す尾巻猿　和子
リス猿の動きすばやし風光る　清子
インプラントすすめられゐて三鬼の忌　まな
赤城より下る朝風麦青む　知子
何処にも除菌スプレー養花天　光子

あゆみの会（浦和）

のどかさや鯉の尾びれが動くのみ　和
長閑けしや数へて潜る朱の鳥居　圭子
長閑なり見沼閑歩の婆仲間　重子
焼栄螺腸をのの字と引き出せり　倶子
若い人と呼ばれすかさず栄螺買ふ　山遊
大目剥き栄螺の腸を吐き出す児　藻好

新樹の会（浦和）

子供の日聞かせる鶴の恩返し　平通
太鼓橋休日つなぐみどりの日　修
鍬入れの仕草たをやか植樹祭　清吉
返照の朱がからみつく初緑　徹雄
老犬の足取り軽しみどりの日　道を
混雑のニュース見て居るみどりの日　京子
裏返る蛙に臍はなかりけり　正信
みどりの日昭和を駆けし戦士かな　鶴城

水明鬼石句会（鬼石）

行きずりの人と愛で合ふ桜道　和子
通学路足元すべる竹の秋　ナヲ子
一病を忘れさせらる白椿　紀子
陽を浴びて白木蓮の目立つ街　洋子

雛の会（浦和）

馬の仔の踏み出す一歩牧の朝　喜恵
江戸切子二つ並べし春の宵　輝翠
夜桜の余情深むる江戸切子　チアキ
利根川の入江明るし花菜風　燈女
馬の仔のはじめの一歩母に向く　政代
立ち上がる仔馬に牧の風青し　佐江

若狭水明会（若狭）

八重桜手招きされし句碑の山　初花
黒髪を束ねし中居八重桜　ことは
八重桜ずしりと重し師のことば　鼓
公園の句碑の笑みたる八重桜　白鷺
来世も妻にするなら八重桜　和風
野蒜摘む野良着のままの酢味噌和　保人
はらからの皆老いにけり野蒜摘む　冬至
八重桜ふつくらとした人と会ふ　郁子
宿縁を背負つてアバヨ花の雨　寛久

☆　☆

和歌山水明句会（和歌山）

白藤に屋根盛り上がる巫女溜り　和子
廃校と決まりし校舎夕桜　道子
山桜へ猟犬撃ぐ男振り　千枝子
葱坊主立ち話する五人衆　千世子
暮の春長期のローン終了す　満耶子
人の世の難問とけず暮の春　きわゑ
お百度を踏む母の背に散る桜　洋子
花明り絵馬よりひびく笛太鼓　廸代

水明創刊90周年記念祝賀会
水明1100号記念全国大会 のご案内

２年間繰り延べてまいりました念願の水明創立90周年記念祝賀会を、水明1100号記念全国大会と共に開催する運びとなり、ここにご案内申し上げます。前年は公共の施設を上手く使用できましたが、本年度は会場の手配が困難を極めました。加えて諸物価高騰の昨今、会場となるホテルでの諸経費も連動しております。実行委員会と致しましては、発展基金からの補填も視野に入れて予算を組みました。誌友・同人・季音同人の皆様にはご理解の程よろしくお願い申し上げます。

■水明1100号記念全国大会

日　　時　令和４年７月６日（水曜日）
受付開始　12時30分　開会13時　閉会16時30分
会　　場　ロイヤルパインズホテル浦和４階「ロイヤルプリンセス」
〒336-0062 さいたま市浦和区仲町2-5-1 ℡048-827-1111
行　　事　水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・山紫賞・鼓笛賞の授賞、季音同人、新同人の紹介、兼題入選句の発表と授賞、講評等。

■水明創刊90周年記念祝賀会

日　　時　令和４年７月６日（水曜日）
受付開始　16時30分　開会17時　閉会19時
会　　場　ロイヤルパインズホテル浦和４階「ロイヤルクラウンBC」
行　　事　来賓ご挨拶、アトラクションなど

■参加費（水明85周年記念全国大会より減額）

記念全国大会・記念祝賀会	25,000円（フルコース宴食付）
記念全国大会のみ	5,000円（コーヒー付）
記念祝賀会のみ	20,000円（フルコース宴食付）

■申込締切

令和４年６月15日（水曜日）
添付の指定「申込書」を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。

※なお、参加費を振込にて別途送金される方は、指定「申込書」の「申込金支払方法」の振込をチェックしてください。
※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。
◎滅多に無い貴重な機会です。永年会員の方々は勿論、新入会員の方々もお誘い合せの上、多数ご参加ください。

水明創刊90周年記念祝賀会・
水明1100号記念全国大会実行委員会・実行委員長

夏季競詠

（令和４年）

恒例の季音・水明集全員が対象の夏季競詠です。ふるって御出句ください。したがって七月投句の水明集はお休みです。

兼題　「金魚」　「和金」「出目金」　など傍題可

「虹」　「朝虹」「夕虹」　など傍題可

「石」（詠込み）※夏の季語で詠む。

句数　両題通じて五句

締切　七月二十五日

投句用紙　七月号巻末に添付

季音の方は季音も投句して下さい。

第十七水明抄

＜合同句集＞

原稿募集

第十六水明抄に次ぐ第十七水明抄を、四年振りに刊行します。水明抄は四年毎に発刊しております。皆様奮って御応募ください。

掲載事項　○作　品……自選二十句。ただし第十六水明抄以後の俳句作品。（平成三十年八月以後のもの）
　　○略　歴……性別、本名、著書、賞、所属句会

記載方法　応募用紙は六月号に添付します。（同型のコピーでも可）。俳句は旧仮名づかいとし、前書は一句分と見なします。

参加資格　○水明同人・誌友　○元水明同人・誌友等

参加費用　三五〇〇円
　　参加者には一冊贈呈します。追加購入希望は一冊につき三五〇〇円。
　　参加者に贈呈、追加購入分共に送料無料。

応募締切　令和四年七月末日（必着厳守）
　　原稿に参加費用を添えてお申込み下さい。

送付先　水明俳句会　第十七水明抄係

発行予定　令和四年十一月

第十七水明抄　編纂委員長　井口俊晴

風　声

○**現代俳句**四月号―「作品十句」欄

「一齣」　星野和葉

桜満つ上座下座のなき円座
花冷のホームに別れと逢瀬かな
開封をためらふ封書桜の夜
相向かひ羽びんびんと鶴の舞
鶴の舞羽の先の先まで愛
鳥の巣や婚整ひし隣の娘
襖絵の竜が風呼ぶ夜半の春
春の旅シャレた私鉄にお洒落して
切り込みのある糸尻よ春深し
春深むその一齣を切り撮りす

○**現代俳句**四月号―「百景共吟より二句鑑賞」欄

浦川聰子氏の鑑賞により　網野月を

白といふ花ではなけれ海碧し

写真の海はオホーツク海だろうか。掲出句を先頭に連作となっており、写真と相俟って読み手を非現実の世界へ導いていく。「花」は季語としての機能ではなく、季感は「白」に象徴される雪であり、冬のイメージ。次に続く〈地に積もり海に融けゆく白きもの〉とともに、壮大な海との対峙を示す。息を呑むような緊迫感がある。

久留島　元氏の鑑賞により　網野月を

恋つて氷なんだ融けてなくなる

氷＝恋、そのこころは、という謎かけの構造だが、答えもかなりベタである。検索してみるとＡｋＢ４８にも、アイスティの氷が融ける様と失恋を重ねた曲があった。ただその曲のように青春の爽やかな思い出にするには、季語「氷」は寒々しく重たい。俳句はしばしば慣用句に近づくが、軽い口語と季語のギャップが、かろうじて掲句を成立させている。

○**現代俳句**四月号―「現代俳句の風」欄

春愁や紅ひきをへて鏡伏す　梅澤輝翠
廃線の鉄路の錆や草萌ゆる　染谷正信
紅梅や幽玄かもす祇王像　宮崎チアキ
立春の日差しにひらく雲のドア　由良ゆら女

○**くぢら**（中尾公彦主宰）四月号―「受贈俳誌美術館」欄　**鬼之介**

遁走の野火をとどむる青不動

○**草笛**（太田土男代表）四月号―「受贈誌一詠」欄　**鬼之介**

グラビアの女優に恋し古暦

○**好日**（高橋健文主宰）四月号―「受贈誌御礼」欄　**鬼之介**

シリウスや夢を捨てざる朧船

○**新月**（松田碧霞主宰）四月号―「受贈俳誌紹介」欄　**鬼之介**

威風堂堂大火へ化学消防車

○**雪嶺**（石本石鬼主宰）四、五、六月号―「受贈誌」欄　**鬼之介**

一の糸替ふる仕種のさやけしよ　〃

葛湯吹く少女よ愛し盛りかな

○**太陽**（吉原文音主宰）四月号―「受贈誌御礼」欄　**鬼之介**

冬木立その一幹に祖父の厳

○**菜の花**（伊藤政美主宰）四月号―「諸家近詠」欄

木造母校今は白堊に冬木立　**鬼之介**

○**山彦**（河村正浩主宰）四月号―「諸家近詠」欄

燃えつきし恋よびさます牡丹の芽　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）四月号―「受贈誌の一句」欄　曲淵徹雄

秋さびし画鋲の残る掲示板

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和四年四月三十日現在―

新　暦文	5口	松本光子	10口
山中みどり	10口	元田亮一	5口
（元）桜林句会	3口	山戸美子	3口
飯田忠雄	10口		
池田雅夫	6口		

―合計52口―

誤植訂正

五月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○二一頁二段一行目

正　宇田○白鷺

誤　宇白×白鷺

水明夏行のご案内

水明恒例の夏行を開催いたします。午後の時間帯で浦和駅近くの会場です。コロナ感染症の関係から受付は事前申込と致します。また初日の午前中に研修会を企画しております。大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。

【日　時】　令和４年７月29日（金）、31日（日）午後１時～５時

【会　場】　ＪＲ浦和駅東口「浦和パルコ」10階　13集会室
浦和コミュニティーセンター

【参加費】　各日1,000円

※研修会「新旧の仮名遣い（仮題）」（無料）を29日10時より２時間の予定で開催いたします。詳細は７月号に「夏行」申込書と共に掲出いたします。

事業部

後記

俳歴五十年の山本鬼之介主宰が句集「マネキン」を上梓。関係各位や水明会員にご送付頂きました。それから二～三ヵ月経ちますと、評論家、俳人、俳句誌等から「マネキン」の評を多数頂いたようです。そこで幹事会から、水明会員の皆様にも一句鑑賞をお願いして、外部の方々の評と合せて、水明誌上に載せたらとのお話がありました。一句鑑賞は、水明会員全員に書いて頂きたかったのですが、水明の紙面にも限りがありますので、主宰のお考えをお伺いして、次の方々にお願いしました。

常任幹事の方、句会指導者の方、第一例会から第五例会の幹事の方等、二十八名の方に締らせて頂きました。それでも、外部の方々十ページ、会員の一句鑑賞十ページ、合わせて二十ページという頁数となりました。会員の一句鑑賞は、驚いたことに、二十八名全員が違う句を鑑賞されています。どうぞご覧下さい。

来る七月六日（水曜日）開催予定の全国大会は、六月十五日（水曜日）申込締切です。五月号巻末の申込書をお忘なく。

新型コロナも今のところ、気をつけながらの外出は大丈夫のようですが、このまま感染者が増えないように祈るばかりです。それにしても、マスクをつけての大会とは情けない限りです。早くマスクをしないで声をたてて笑ったり、喜んだりしたいと思います。尚、全国大会兼題句は一七四八句集まりました。ありがとうございました。

今月号に第十七水明抄の応募用紙を挿入しました。応募用紙は今月号のみです。ご心配の方はコピーをなさって下さい。多くの方のご参加お待ちしています。

（節代）

今月のはてな?

幹竹割（からたけわ）り　4頁
擽（くすぐ）る　21
抓（つね）る　21
成木責（なりきぜめ）　28
鑢（やすり）　29
鶸（ひわ）　55
風戯（かぜそば）へ　57
戞菜（どくだみ）　63
繋（かか）り舟　57
背黄青鸚哥（せきせいいんこ）　74
行（くだり）　85

水明発行所受付時間

曜日：**（月・水・金）**

時間：12時半～午後4時半

（火・木・土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和四年六月号
通巻一一〇一号
令和四年六月一日発行

発行人　山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048－886－六〇〇三

発行所　水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048－822－四七四一

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇－〇－一九二三九三

印刷所　中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

題

季音 雪 月 花

八月号 六月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名（俳号）

きりとりせん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

九月号　六月二十五日締切

都市又は府県名	氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

九月号　六月二十五日締切

氏名（俳号）

六月の兼題「梔子の花」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

掛軸をかな女に替ふる暮の春　大橋廸代
裏口は一人の幅よ木瓜の花　大村節代
神磯の日の出の色よ濃山吹　小倉倭子
野仏の大き耳朶雲雀聴く　栢尾さく子
花筏かつて不浄門なる三文字　菊池ひろこ
賢妻も愚妻と呼ばれ四月馬鹿　五明　昇
科学者も木偶も舌出す万愚節　藤澤喜久
ネックレス置き花冷の指耳に　大場順子
春深し弥勒菩薩の思惟の指　梅澤佐江
音ほどは高くあがらず紙風船　松井由紀子
天守にも瀬戸の潮の香風光る　森川義子
若草やかつて皇居に近衛兵　山田美佐尾
モナリザの微笑の中の春愁　日髙道を
獣には獣のいのち朧かな　青木鶴城
恋の日の波音今も桜貝　大塚茂子
藩校をしのび飛び石濃山吹　近藤徹平
御食ひ初め小さき器の桜鯛　野田静香
ひよろ長き土筆となりぬ塾隣　福田千春

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道＜身辺トピック＞

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明＜随筆＞

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明　令和四年六月一日発行　毎月一日発行

水明抄

山本鬼之介

街並の風情を保つ春の雪　越田栄子
切腹は武士の心得初桜　染谷正信
風はらみ夢のふくらむ春コート　山岸久美子
父となる窓を開ければ初桜　横山君夫
時刻表ひろげ撮り鉄春休　渋谷きいち
一つづつ遊具を包む朧かな　橋本京子
蒼天や甲斐路満目桃の花　反町　修
つぎつぎに春を繰り出すバスの窓　丸屋詠子
どこまでも透きとほるみづ山葵沢　元田亮一
白魚や日の本一の斬られ役　檜鼻ことは
花冷えの外階段のハイヒール　梅澤輝翠
花時の雨に君待つ喫茶店　笹本啓子
人憩ふ見晴らし峠春の山　西幅公子
誘ふ目の視線あまたや雛の市　新　暦文
旧友と再会したる駅おぼろ　村杉清吉
日脚伸ぶ山が落暉を持ち上ぐる　保坂翔太
建国日床屋の椅子で聴くラジオ　曲淵徹雄
ディオールの美しすぎる春の服　原田秀子

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	青木鶴城 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

（第九十五巻　第六号）　定価　一〇〇〇円